多賀城市文化財調査報告書第134集

多賀城市内の遺跡1

―西沢遺跡第２次調査の概報―

平成２９年３月

多賀城市教育委員会

多賀城市文化財調査報告書第一三四集　多賀城市内の遺跡1　西沢遺跡第2次調査の概報

平成二十九年三月　多賀城市教育委員会

序　文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡附寺跡や、多くの埋蔵文化財包蔵地があり､それらは市域の約４分の１にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であり、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切の保護し、活用に努めているところです。

さて、本書は平成６年度に実施した西沢遺跡第２次調査の概報であります。当該調査区は多賀城跡東側の沢を一つ隔てた緩斜面上に位置し、古代の竪穴住居跡や規則的に配置された掘立柱建物跡のほか、３０棟を超す掘立柱建物跡からなる中世の屋敷跡が発見されました。

今回は、調査成果の一部を概略的に御報告するものであります。多賀城跡に密接に関わる古代の建物群や、中世の大規模な屋敷跡の発見は、本市の古代･中世史を考えるうえで貴重な成果となりました。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成２９年３月

多賀城市教育委員会

教育長　　小　畑　幸　彦

例　言

1　本書は、平成６年度に受託事業として実施した西沢遺跡第２次調査の概要を記したものである。

2　遺構の名称は、第１次調査からの通し番号である。

3　測量法の改正により、平成 14 年４月１日から経緯度の基準は日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなった。一方、東日本大震災による地盤変動により、本市域は東に約３ｍ、南に約１ｍ移動したとされているが、当該区の変動値が不明であることから、挿図中の基準線は調査時に設定したもの（ＳＮ00、ＥＷ00）を使用した。なお、震災前の世界測地系に当てはめると、ＳＮ00、ＥＷ００は以下のとおりである。

ＳＮ00：Ｘ＝－ 187,851.168、ＥＷ00：Ｙ＝ 14,087.879（いずれも平面直角座標系 10 系）

4　挿図中の高さについては標高地を示しているが、本市では震災後に 30㎝前後の沈下が認められていることから、震災前の標高地を提示している。

5　土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原）を参考にした。

6　本書は、調査員全員の協議のもと、武田健市が執筆・編集を行った。遺物の写真撮影は村上詩乃・茂泉光雄が担当した。

7　調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。また、現地説明会及び遺跡報告会で一部成果について資料発表しているが、内容が異なる場合は本書が優先する。

調査要綱

1　調 査 主 体　多賀城市教育委員会　教育長　櫻井　茂男

2　調 査 担 当　多賀城市埋蔵文化財調査センター　所　長　鳥山　文夫

3　調査担当者　多賀城市埋蔵文化財調査センター　研究員　石本　敬　技師　武田健市

調査員　伊藤　浩

4　所　在　地　多賀城市浮島字西沢 70、71、74、76 番

5　調 査 期 間　平成６年４月 25 日～ 12 月 21 日

6　調 査 面 積　3,735㎡

目　　次

1　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 2

2　調査に至る経緯と経過の概要 …… 2

3　調査成果 …… 3

4　まとめ …… 24

凡　例

1　本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物跡　　ＳＩ：竪穴住居跡　　ＳＤ：溝跡　　ＳＫ：土壙　　Ｐｉｔ：柱穴及び小穴

ＳＸ：その他の遺構

2　奈良・平安時代の土器の分類記号は下記のとおりである。詳細は『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』（多賀城市教育委員会　2003）で報告している。

（１）土師器坏

Ａ類：ロクロ調整を行わないもの

Ｂ類：ロクロ調整を行ったもの

ＢⅠ類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

ＢⅡ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

ＢⅢ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

ＢⅣ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

ＢＶ類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

ＢⅠ・ＢⅡ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをａ、静止糸切りによるものをｂ、回転糸切り（糸切り）によるものをｃとして細分する。

（２）土師器甕

Ａ類：ロクロ調整を行わないもの

Ｂ類：ロクロ調整を行ったもの

（３）須恵器坏

Ⅰ類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

Ⅱ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

Ⅲ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

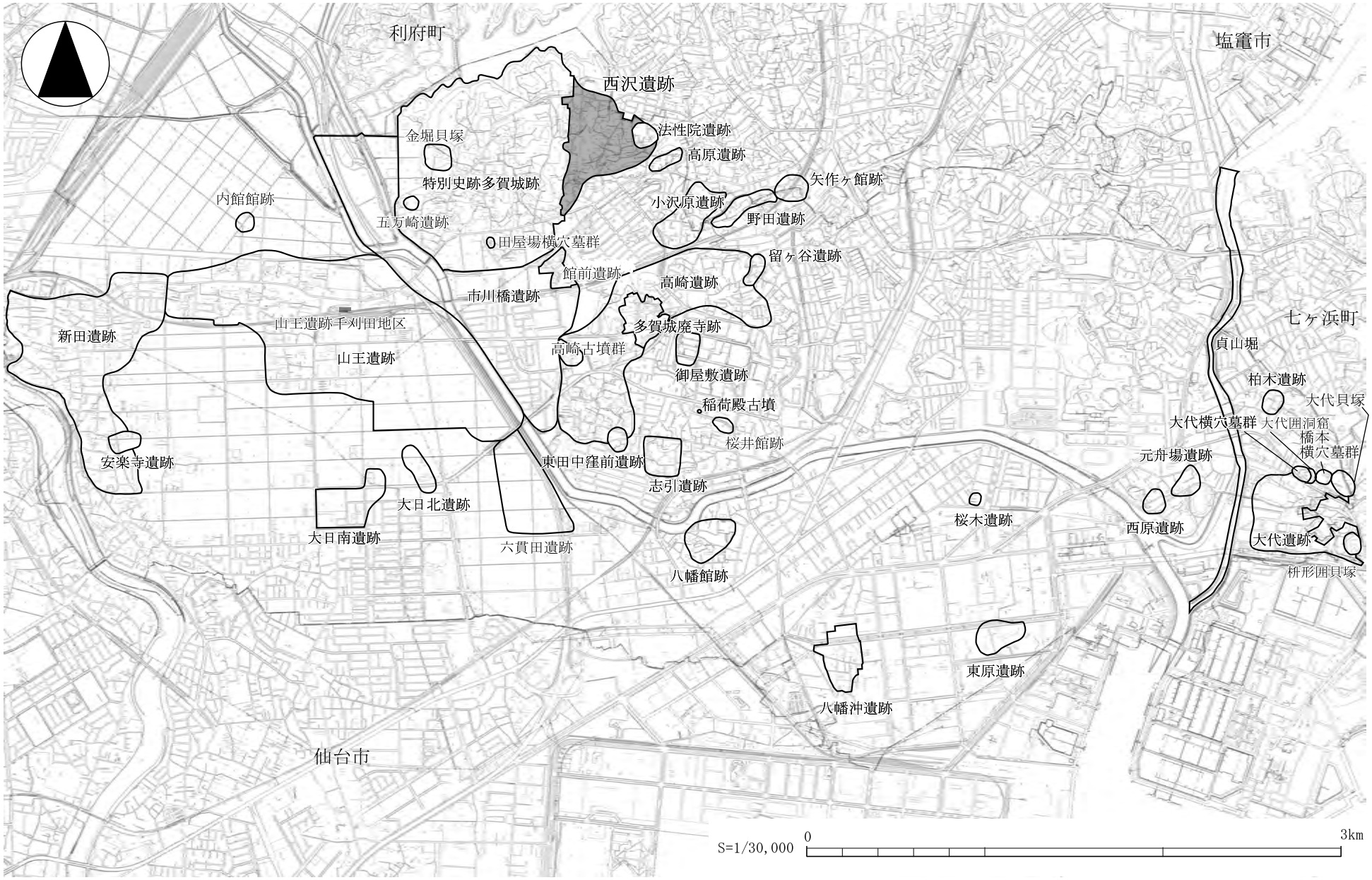
Ⅳ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

Ⅴ類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

Ⅰ・Ⅱ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをａ、静止糸切りによるものをｂ、回転糸切り（糸切り）によるものをｃとして細分する。

3　瓦の分類は「多賀城跡　政庁跡　図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1980）、「多賀城跡　政庁跡　本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1982）の分類基準に従った。

4　本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が 907 年とされた秋田県払田柵跡外郭線Ｃ期存続中に降灰し、承平４年（934 年）閏正月 15 日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907 ～ 934 年の間とする考えと、『扶桑略記』延喜 15 年（915 年）７月 13 日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ 915 年とする考えがある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10 Ｃ頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。本書ではこれらの研究成果を基に、灰白色火山灰を 10 世紀前葉に降下したものとする。



第１図　多賀城市内の遺跡

１　遺跡の地理的・歴史的環境

本遺跡は市北部の市川・浮島地区に所在している。地形的には松島丘陵から塩釜方面に向かって張り出した低丘陵上南西端部にあたり、東西 450 m、南北 750 mの範囲を占めている。標高は北側丘陵尾根付近が 46 mと最も高く、南側沖積地と接する付近では６mとなっている。遺跡内の標高差は 40 mに達し、全体的には北から南に向かって低くなる斜面の合間に、大小の沢地形が複雑に入り込んだ景観を呈している。今回の調査区は遺跡中央部にある標高 28 ～ 36 mの緩斜面上にあり、本遺跡内では最も広い平坦地となっている。

さて、本遺跡では平成 28 年度までに 29 次に及ぶ発掘調査を実施しており、平安時代を中心に数多くの遺構・遺物を発見している。なかでも、平成７年度に実施した第３次調査では平安時代の竪穴住居を多数発見したほか、沢地に近接した場所には鍛冶工房が設けられていたことが明らかとなった。多賀城跡東側に近接した場所での発見であり、関連性が注目される。

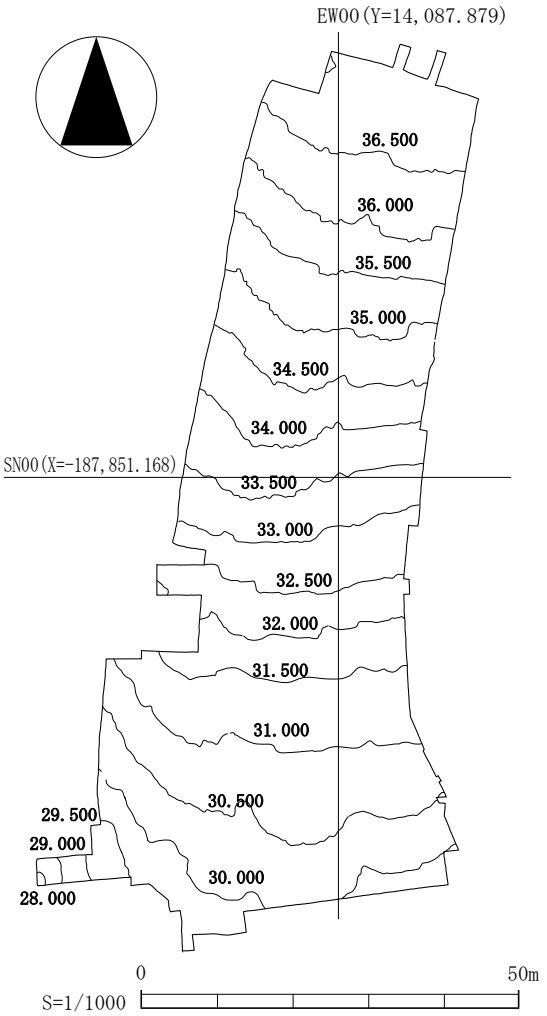
２　調査に至る経緯と経過の概要

本件は、宅地造成計画に伴う発掘調査である。平成１年１月、地権者より当該区の造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出され、これを受けて平成６年４月 25 日より記録保存の本発掘調査に着手したものである。

対象面積6,182㎡のうち、遺構が確認された範囲が約3,700㎡と広大であることに加え、精査の結果、一辺９mにも達する大規模な竪穴住居跡や古代の掘立柱建物群、整然と配置された中世の建物群など、各時代をみても特筆すべき遺構が数多く確認されたことから、８か月の長期間の調査となった。この

第２図　調査区位置図

間、記録的な雨量となった「平成６年９月洪水」にみまわれるなどしたが、10 月８日には現地説明会を開催し、発見した遺跡の状況を一般公開した。11 月７日から盛土造成となる南半部の表土掘削を開始し、ＳＢ 164 掘立柱建物跡などを発見した。12 月 21日、調査器材の撤収をもって現地調査の一切を終了した。



第３図　発掘基準線及び標高地

３　調査成果

今回の調査では､現代の表土下で明黄褐色土や褐色土、にぶい黄褐色粘土などが主体となる粘質土が確認され、これら上面で竪穴住居跡や掘立柱建物跡、溝跡、土壙など多数の遺構を発見した。以下、主な遺構について概要を記載する。

ＳＩ 144 竪穴住居跡（第５図）

【位置】調査区中央部、Ｎ 03 ～Ｓ 03、Ｅ 03 ～Ｅ 09 付近で発見した。

【残存状況】ＳＩ 141 への拡幅時に上面の大半が破壊され、南辺がすべて滅失しているなど、残存状況は悪い。

【重複】ＳＩ 141 と重複し、それよりも古い。

【平面形・方向】平面形は方形であり、方向は北辺で測ると西で約１度南に偏している。

【規模】東西約 5.9ｍ、南北約８ｍである。

【壁の状況】住居の壁は残存していない。

【床面の状況】ＳＩ 141 構築時に破壊されている可能性が高く、残存する掘方整地土上面が床面であるか否か定かではない。整地土の厚さは２～６㎝であり、褐色土（10YR4/4）及びにぶい黄褐色土（10YR5/4）である。

【主柱穴】対角線上で４基確認している（主柱穴１～４）。柱はすべて抜き取られているが、主柱穴２・３では柱のあたり痕跡が確認できる。掘方の平面形は方形を基調としており、規模は主柱穴３で測ると長径 65cm、短径 50cm である。柱抜取り穴はいずれも柱穴中心部にあり、埋土は明黄褐色土（10YR6/6）や灰黄褐色土（10YR）が多く混入する褐色土（7.5YR4/4）またはにぶい黄褐色土（10YR4/3）が主体である。

【カマド】北辺中央部に付設されている。残存するのは燃焼部の窪みのみであり、規模は不明である。

【周溝】残存する西・北・東辺で確認した。規模は幅 15 ～ 30cm、深さは北辺で約 10cm である。

【遺物】出土していない。

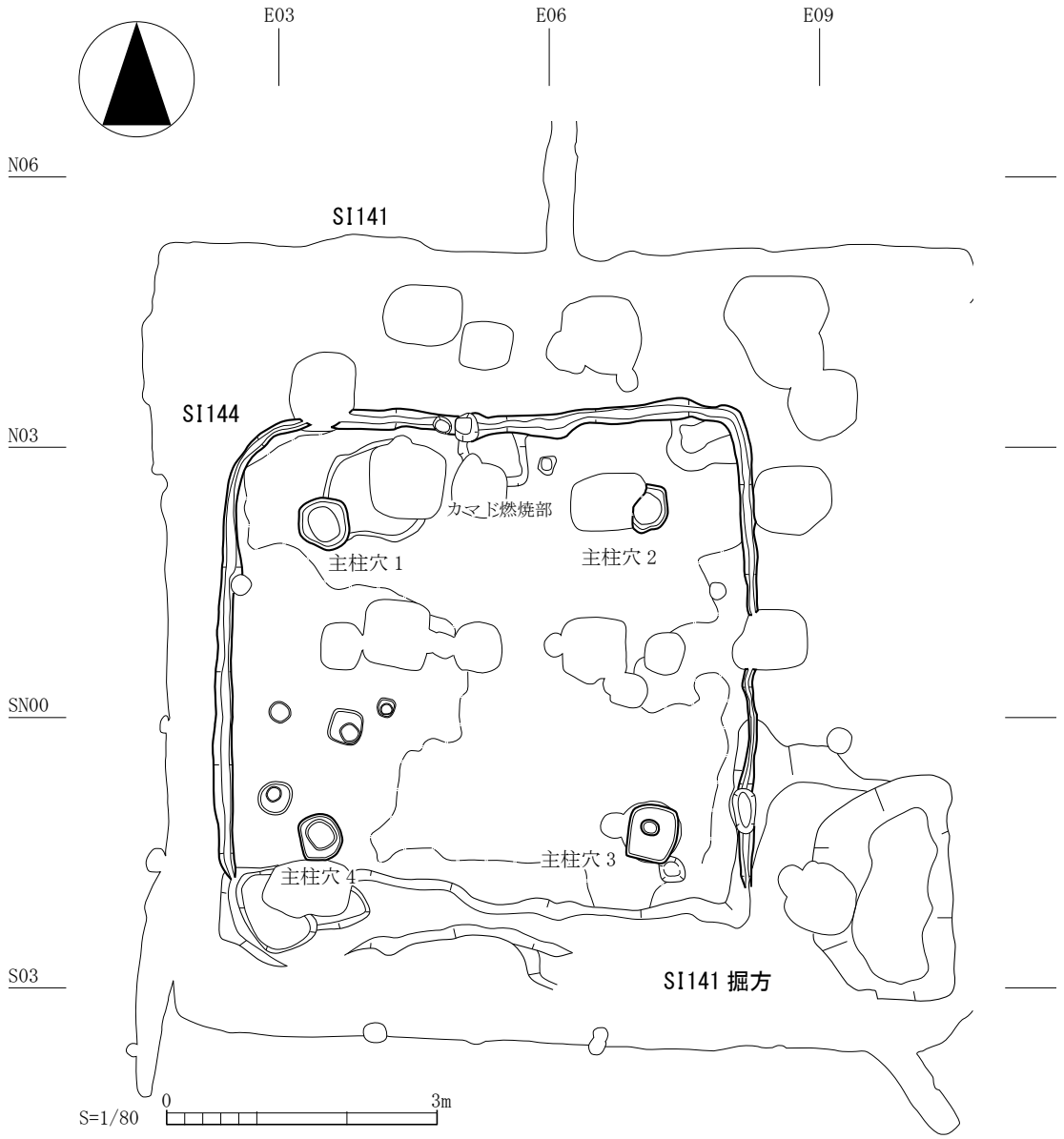
ＳＩ 141 竪穴住居跡（第６図）

【位置】調査区中央部、ＳＮ 00 ～Ｎ 09、ＥＷ 00 ～Ｅ 09 付近で発見した。

【残存状況】全体的に後世の削平を受けており、残存状況は悪い。

W36
W27
W18
W09
EW00
E09
E18
N54
N45
N36
N27
N18
N09
SN00
S09
S18
S27
S36
S45
S54
36.500
36.000
35.500
35.000
34.500
34.000
33.500
33.000
32.500
32.000
31.500
31.000
30.500
30.000
29.500
29.000
28.000
SB166
SB165
SB168
SB167
SB169
SB175
SB171
SB174
SB172
SI141
SB151
SB152
SB153
SB179
SB176
SD51
SB154
SB156
SB157
SK57
SB181
SB159
SB158
SI142
SB182
SX54
SB184
SB185
SB191
SB190
SB183
SB186
SX121
SI143
SB189
SB187
SB188
SB161
SB192
SB160
SB194
SB162
SB163
SB197
SB195
SB200
SB196
SB198
SB164
SB199
0
30m
S=1/400

第４図　調査区全体図



第５図　ＳＩ144 平面・断面図

【重複】ＳＩ 144、ＳＢ 152・176・177、ＳＸ 79・226 と重複し、ＳＩ 144 よりも新しく、それ以外のものよりも古い。

【変遷】２時期の変遷（Ａ→Ｂ期）がある。Ｂ期に造り替える際に南辺で 15 ～ 40cm ほど拡張しているものの、それ以外は床の嵩上げが確認されるのみである。

【平面形・方向】平面形は方形であり、方向は北辺で測るとおよそ東西の発掘基準線と一致する。

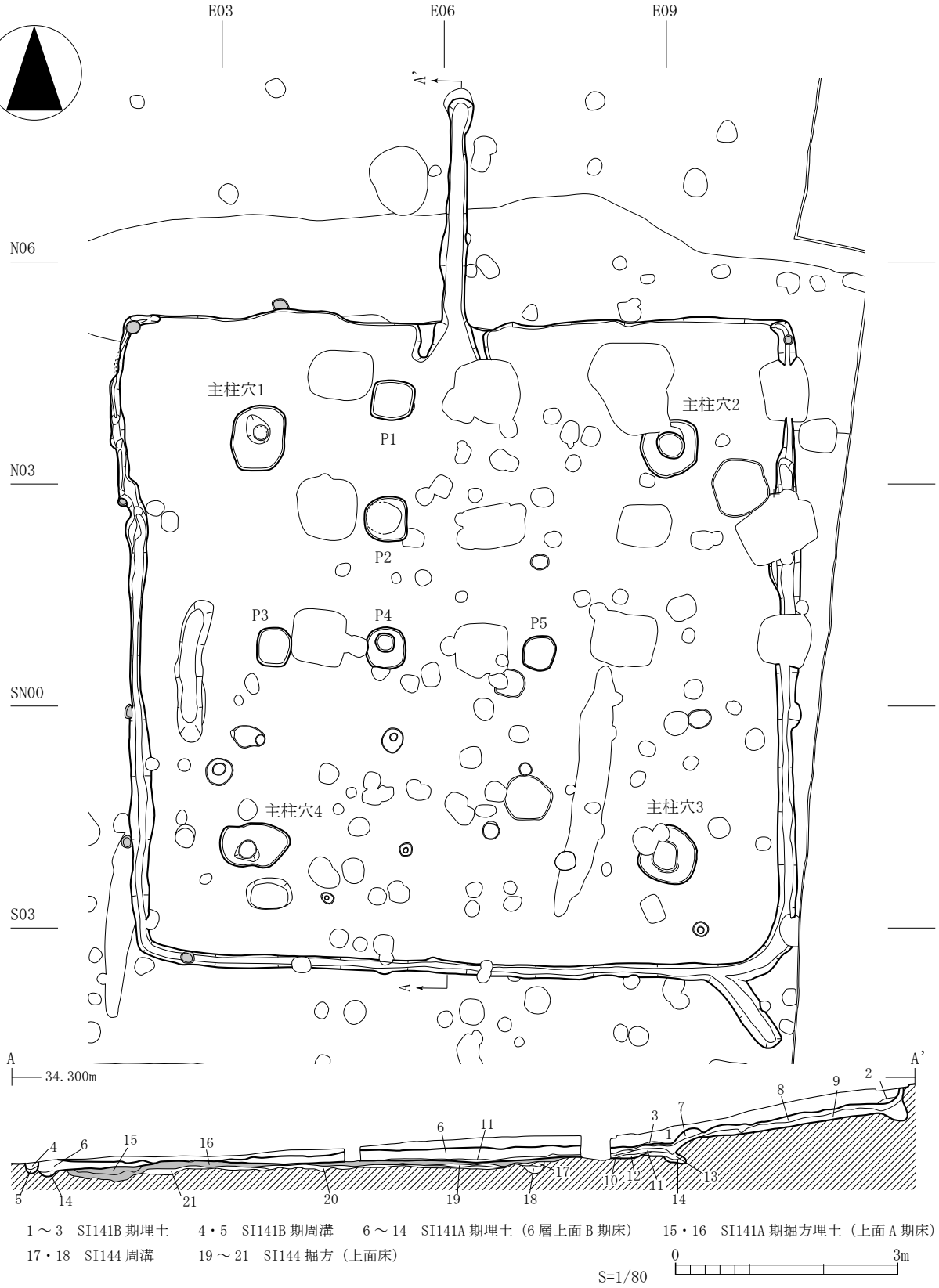
【規模】東西約 9.2 ｍ、南北約 8.9 ｍである。

【壁の状況】地山を壁としている。およそ垂直に立ち上がっており、残存する壁高は北辺で 40 ～ 50cm である。

【床面の状況】Ａ期床はＳＩ 144 を拡幅した後の掘方整地土上面であり、厚さは約 10cm である。埋土はにぶい黄褐色土（10YR5/4）が主体であり、黒褐色土（10YR3/1）や褐色土（7.5YR4/2）が多く混入している。Ｂ期床は同位置で嵩上げしたものであり、厚さは約 20cm である。５層に細分できるが、いずれも黒褐色土（10YR3/2、7.5YR3/1・3/2）が主体である。

【主柱穴】Ｂ期対角線上で４基確認している（主柱穴１～４）。Ａ期のものは未検出であることから、Ｂ期

とおよそ同位置にあったものと推測される。主柱穴１・４で柱痕跡、主柱穴２・３で柱抜取り穴を確認した。掘方の平面形はおよそ方形を基調としており、規模は主柱穴１で測ると長径約 90cm、短径約 70cm である。柱痕跡は直径約 20cm であり、埋土は粘性のある暗褐色土（10YR3/2）である。柱抜取り穴はいずれも柱穴



第６図　ＳＩ141平面・断面図

の中央部に認められる。埋土は黒褐色土（10YR3/2）または褐色土（10YR4/4）が主体であり、にぶい黄橙色土（10YR7/2）やにぶい黄褐色土（10YR4/3）が多く混入している。

【カマド】北辺中央部に付設されており、Ａ・Ｂ期ともに同一のカマドを使用している。規模は燃焼部最大幅 70cm、奥行き 60 cm、残存する壁高は約 20cm である。住居北側には煙道が設けられており、住居外に向かって緩やかに上がっている。規模は長さ約３ｍ、最大幅約 40cm である。

【周溝】Ａ期では、南辺以外に明確に周溝と認められる痕跡は確認していない。Ｂ期では北辺を除く３辺で確認した。規模は幅 20 ～ 30cm、深さは西辺中央付近で 25cm であり、住居外壁側では中位付近で外側に抉れている箇所が認められる。また､南東端部には住居外側に向かって延びる外延溝が設けられている。

【壁柱穴】周溝底面で、壁柱穴かと考えられる小規模なピットを７基確認している。

【住居内埋土】黒褐色土（7.5YR3/2）が主体であり、にぶい黄褐色土（10YR5/4）や褐色土（10YR4/4）が斑状に混入している。カマド周辺や煙道部には焼土が混入しており､カマド上部では特に多く認められる。厚さは住居内が約 10 cm、煙道部で約 20cm である。

【遺物】Ｂ期床上面より土師器甕（Ａ類)､須恵器甕､住居内埋土から土師器甕（Ａ類)､須恵器坏（Ⅱａ類)・稜椀が出土している。

【その他】Ｂ期北西部にＴ状に配置された柱穴が認められる（Ｐ１～５）。東西２間、南北２間分あり、柱間は東西方向のものが西から約 1.5 ｍ、約 2.0 ｍ、南北方向のものが南から約 1.7 ｍ、約 1.6 ｍである。柱穴の規模はいずれも主柱穴に比べ小規模であり、Ｐ４で測ると一辺約 50 cmである。

ＳＩ 142 竪穴住居跡（第７図）

【位置】調査区南部、Ｓ 18 ～ 27、ＥＷ 00 ～Ｗ 09 付近で発見した。

【残存状況】全体的に後世の削平を受けており、南東部が滅失しているなど残存状況は悪い。

【重複】ＳＢ 181・183 と重複し、それらよりも古い。

【平面形・方向】平面形は東西に長い方形であり、方向は北辺で測ると西で約８度北に偏している。

【規模】東西約７ｍ、南北約５ｍである。

【壁の状況】地山を壁としている。およそ垂直に立ち上がっており､残存する壁高は北辺で約 30cm である。

【床面の状況】掘方埋土上面が床であるが、一部地山をそのまま床としている箇所もある。埋土の厚さは約４～ 15 cmであり､黒褐色土（10YR4/2）や黄褐色土（10YR5/6）が多量に混入する灰黄褐色土（10YR4/2）である。

【主柱穴】対角線上で４基確認している（主柱穴１～４）。主柱穴１・４で柱痕跡、主柱穴２・３で柱抜取り穴を確認した。掘方の平面形は不整形であり､規模は主柱穴１で測ると長径約 90cm､短径約 70cm である。柱痕跡は直径 18cm であり、埋土は粘性のある褐色土（10YR4/4）である。柱抜取り穴は柱穴を大きく壊しており、埋土はにぶい黄褐色土（10YR4/3）である。

【カマド】北辺中央部に付設されている。規模は燃焼部最大幅 75cm、奥行き 60 cm、残存する壁高は約 20cm である。住居北側には煙道が設けられている。住居外に向かって緩やかに上がっており、先端部には直径約 40cm、深さ 40cm の煙出しピットが確認できる。煙道の規模は長さ 1.8 ｍ、最大幅 45cm である。

【周溝】４辺すべてで確認した。規模は幅 20 ～ 40cm、深さは西辺北側で 15cm であり、住居外壁側では中位付近で外側に抉れている箇所が認められる。また、北辺東側から東辺にわたり、周溝内に瓦が敷設されている。

【住居内埋土】黒褐色土（10YR3/2）が主体であり、にぶい黄褐色土（10YR5/4）が斑状に混入している。カマド周辺や煙道部には焼土が混入しており、カマド上部では特に多く認められる。厚さは住居内が 10 ～ 20 ㎝、煙道部で５～ 10㎝である。

【遺物】周溝に敷設された平瓦（ＩＡ・ⅡＢａ・ⅡＢｂ類）、丸瓦（Ⅱ・Ⅱｂ類）のほか、周溝から須恵器坏（Ⅲ類）、住居内埋土から土師器坏（ＢⅡ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅱ・Ⅴ類）が出土している。このうち、平瓦・丸瓦には「田」「物」「占」の刻印が認められるものもある。

ＳＩ 143 竪穴住居跡（第８図）

【位置】調査区南部、Ｓ 33 ～ 42、Ｗ 06 ～Ｗ 12 付近で発見した。

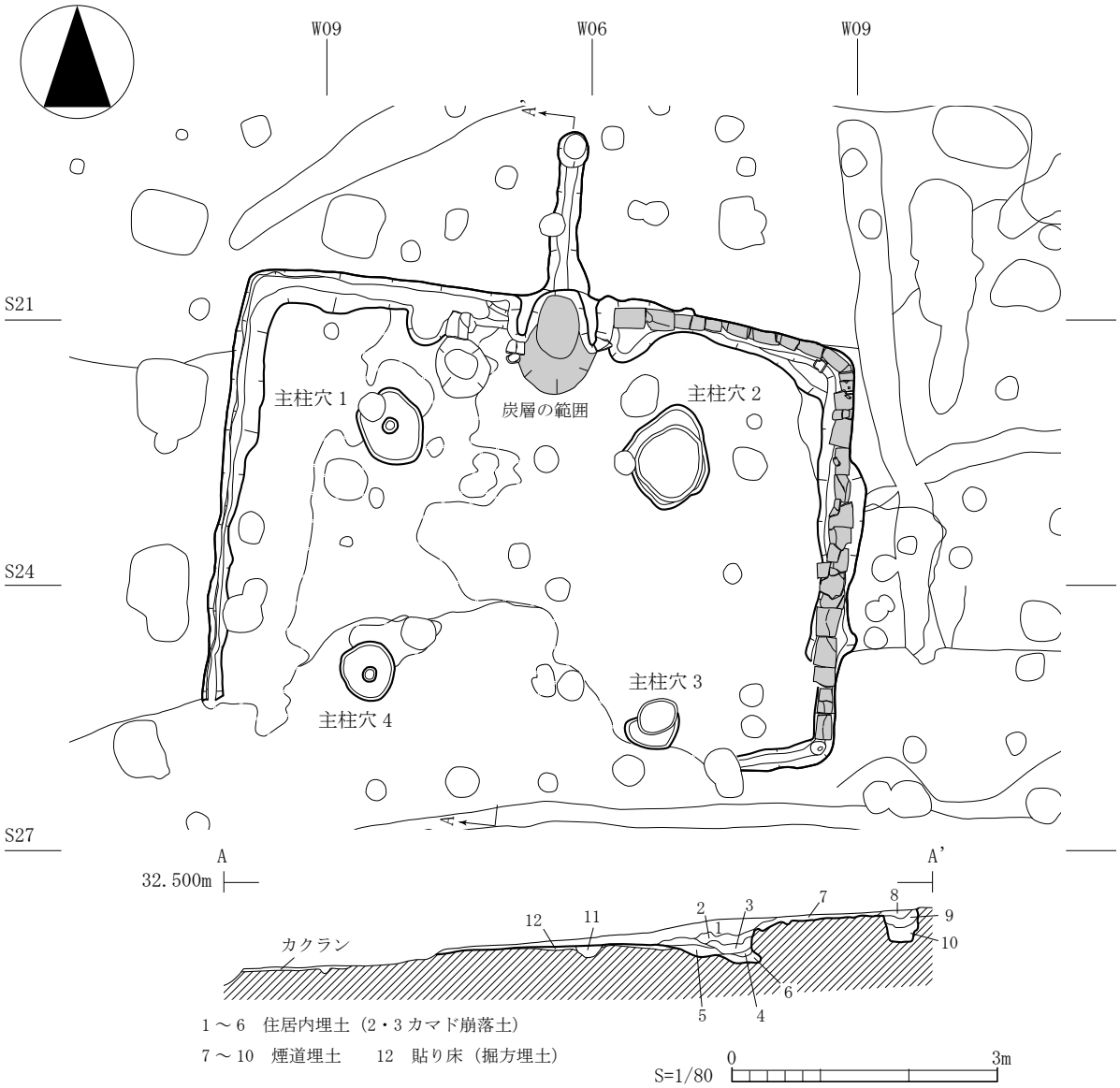
【残存状況】全体的に後世の削平を受けており、中央部及び南東部が滅失しているなど残存状況は悪い。

【重複】ＳＢ 188・193・194、ＳＤ 76・78 と重複し、それらよりも古い。

【平面形・方向】平面形は方形であり、方向は北辺で測ると西で約６度北に偏している。

【規模】東西約 7.8 ｍ、南北約８ｍである。

【壁の状況】地山を壁としている。北東部で僅かに残存する壁面を見ると、およそ垂直に立ち上がっている。



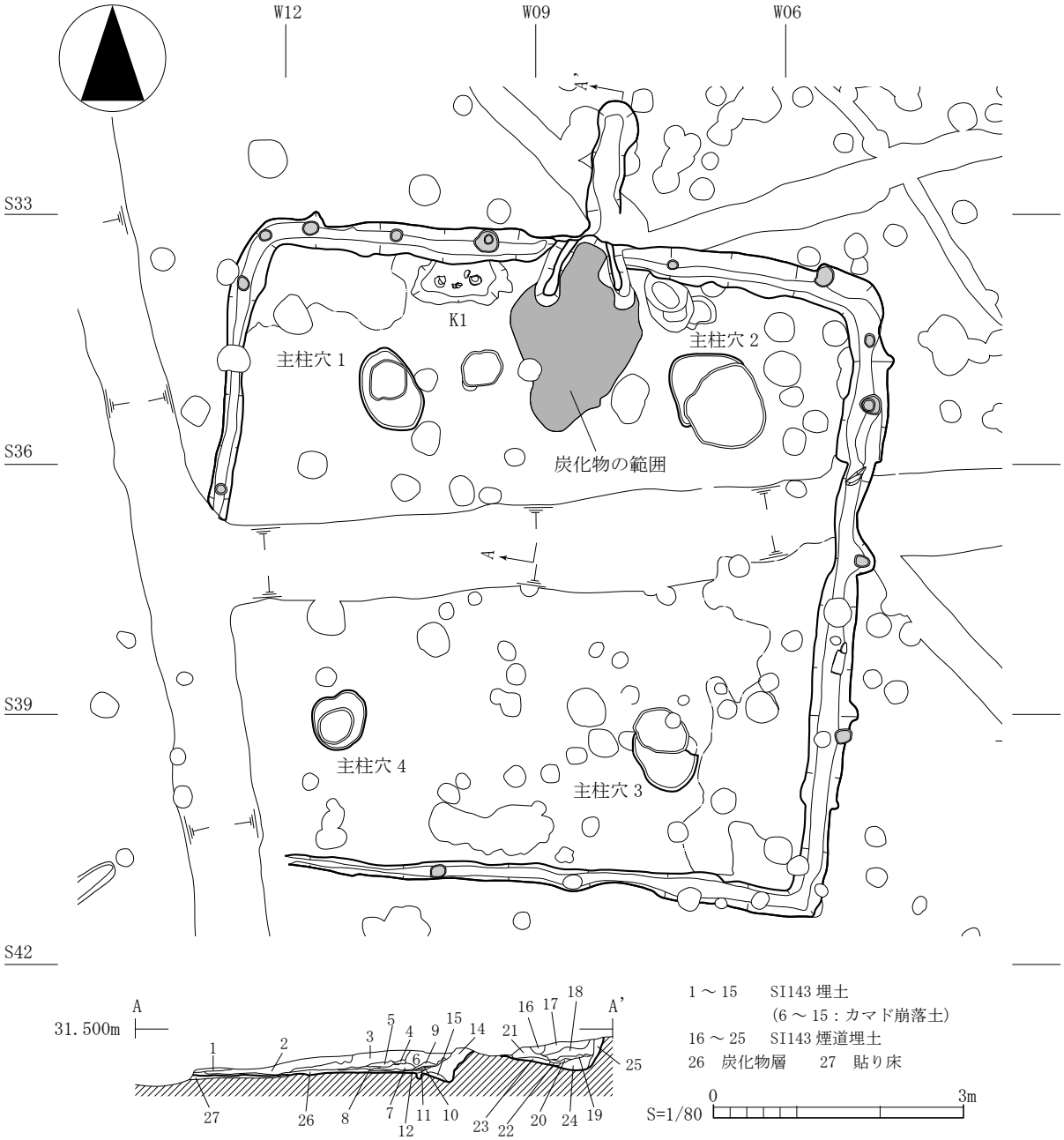
第７図　ＳＩ 142 平面・断面図

残存する壁高は最大 25cm である。

【床面の状況】掘方整地土上面が床であるが、一部地山をそのまま床としている箇所もある。厚さは約２～６㎝であり、地山に近い明褐色土（7.5YR5/8）である。

【主柱穴】対角線上で４基確認している（主柱穴１～４）。柱はすべて抜き取られており、主柱穴１で僅かに柱のあたり痕跡を確認した。掘方の平面形は不整形であり、規模は主柱穴１で測ると長径約 100cm、短径約 70cm である。柱抜取り穴は柱穴を大きく壊しており、埋土は褐色土（10YR4/4・4/6）や灰黄褐色土（10YR4/2）が主体である。

【カマド】北辺中央部に付設されている。規模は燃焼部最大幅 80cm、奥行き 90 ㎝、残存する壁高は約 20cm である。住居北側には煙道が設けられており、外側に向かって緩やかに下っている。煙道の規模は長さ 1.7 ｍ、最大幅 65cm である。



第８図　ＳＩ143 平面・断面図

【周溝】４辺すべてで確認した。規模は幅 20 ～ 50cm、深さは東辺で約 20cm である。

【壁柱穴】周溝底面で壁柱穴の痕跡を 14 基確認した。いずれも小規模なものであるが、直径約 10 cmの柱痕跡が確認できるものもある。

【住居内埋土】黄褐色砂質土（10YR5/6）やにぶい黄褐色土（10YR4/3）が主体である。カマド周辺や煙道部には焼土が混入しており、カマド上部では特に多く認められる。厚さは住居内が 10 ～ 20 cm、煙道部で６～ 25cm である。

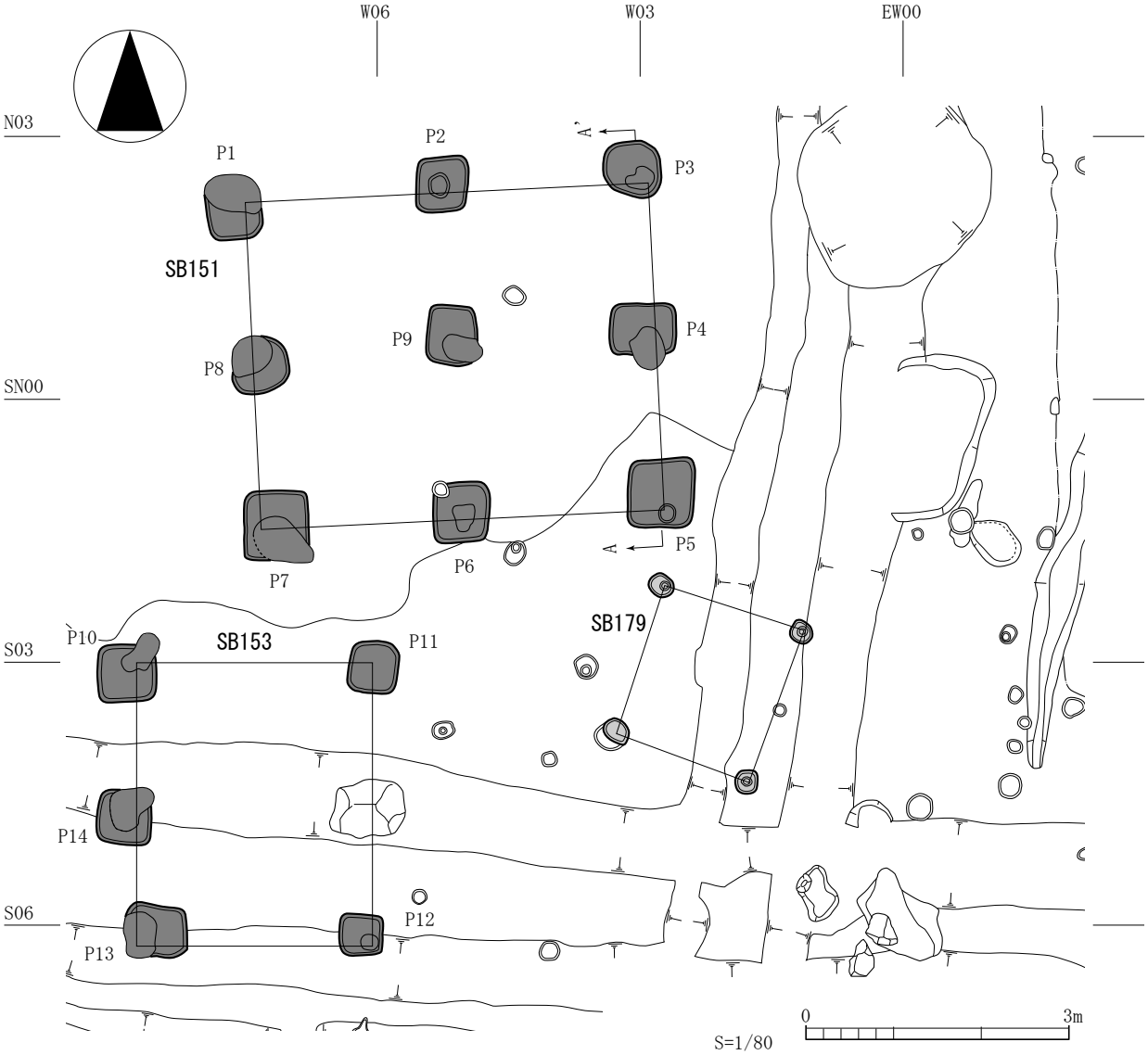
【遺物】主柱穴掘方から土師器坏（ＢⅡ類）、須恵器甕、土壙（Ｋ4）から土師器坏（ＢＶ類）、周溝から土師器坏（ＢⅡ類）、住居内埋土から土師器甕（Ａ・Ｂ類）、須恵器杯（Ⅲ・Ⅴ類）、平瓦（ＩＡ・ⅡＢ類）が出土している。

ＳＢ 151 掘立柱建物跡（第９・10 図）

【位置】調査区中央部、Ｎ 03 ～Ｓ 03、Ｗ 03 ～ 09 付近で発見した

【桁行・梁行】桁行２間、梁行２間の東西棟総柱建物跡である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は９基（Ｐ１～９）検出しており、Ｐ２・３・５・６で柱痕跡、その他の柱穴で柱抜取り穴を確認した。



第９図　SB151・153・179 平面図

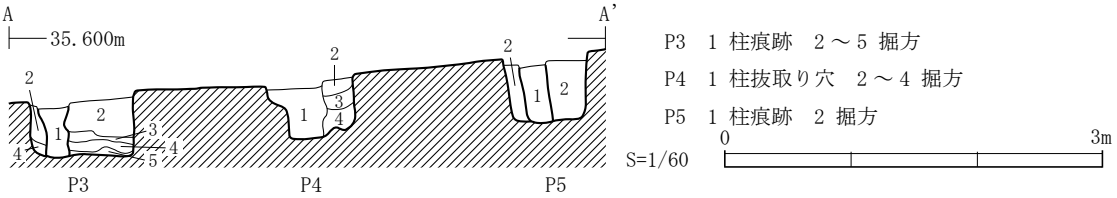
【重複】なし

【方向・規模】方向は梁行（東側柱列）で測ると北で約４度西に偏している。建物の規模は桁行が北側柱列で総長約4.6ｍ、柱間は西から約2.3ｍ、2.34ｍである。梁行は東側柱列で総長3.8ｍ、柱間は北から1.84ｍ、1.96ｍである。

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は南東隅柱穴（Ｐ５）で測ると、１辺80㎝、深さ40㎝である。埋土はにぶい黄褐色土（10YR4/3）、暗褐色土（10TR3/3）などが主体であり、浅黄色の粘質土や黄褐色土がブロック状に混入している。

【柱痕跡】直径18～22㎝の円形である。埋土は粘性のあるにぶい黄褐色(10YR4/3)及び暗褐色土(10YR3/3)であり、炭化物や粘質土粒が若干混入している。

【柱抜取り穴】柱穴の北側から掘り込まれているものと（Ｐ１・８）、南側から掘り込まれるもの（Ｐ４・７・９）がある。埋土は浅黄色粘質土がブロック状に混入する暗褐色土（10YR3/3）である。



第10図　SB151断面図

ＳＢ153掘立柱建物跡（第９図）

【位置】調査区中央部、Ｓ03～06、Ｅ06～09付近で発見した

【桁行・梁行】桁行２間、梁行１間の南北棟建物跡である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は５基（Ｐ10～14）検出しており、このうちＰ11を除く４基の柱穴で柱抜取り穴を確認した。

【重複】なし

【方向・規模】方向は桁行（西側柱列）で測ると、およそ南北の発掘基準線と一致している。建物の規模は桁行が西側柱列で総長約３ｍ、柱間は北から約1.6ｍ、約1.4ｍである。梁行は北側柱列で約2.8ｍである。

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は北西隅柱穴（Ｐ10）で測ると、長辺75㎝、短辺65㎝、深さ50㎝である。埋土は黒褐色土（10YR3/2）や灰黄褐色土（10YR4/2）、褐色土（10YR4/4）が主体であり、浅黄色粘質土が斑状に混入している。

【柱抜取り穴】西側柱列がすべて抜き取られている。

ＳＢ152掘立柱建物跡（第11図）

【位置】調査区中央部、Ｎ06～ＳＮ00、ＥＷ00～E12付近で発見した。

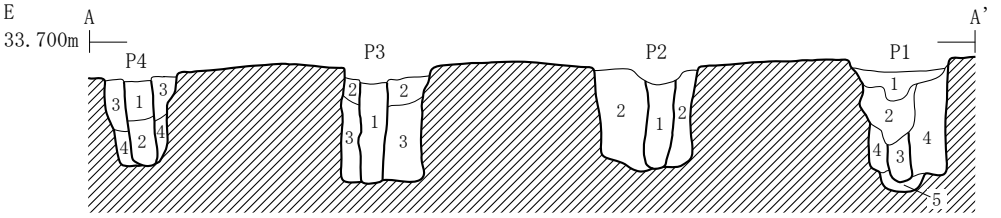
【桁行・梁行】桁行３間、梁行２間の東西棟総柱建物跡である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は12基（Ｐ１～12）検出しており、すべての柱穴で柱痕跡を確認した。

【重複】ＳＩ141、ＳＢ176・175、ＳＸ79・226と重複しており、ＳＩ141よりも新しく、それ以外のものよりも古い。

【方向・規模】方向は桁行（北側柱列）で測ると西で３度12分北に偏している。建物の規模は桁行が北側柱列で総長6.04ｍ、柱間は西から1.90ｍ、2.28ｍ、1.86ｍである。梁行は西側柱列で総長3.48ｍ、柱

【北側柱列断面】



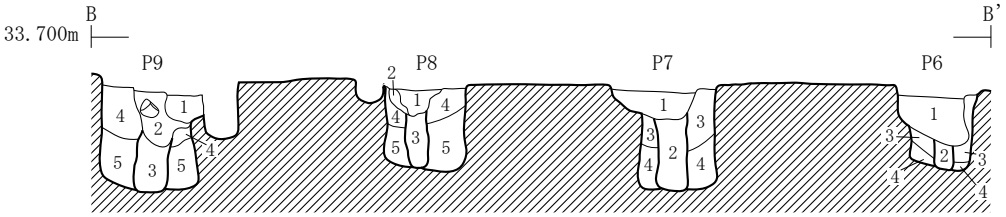
P4　1・2 柱痕跡
　　3・4 掘方

P3　1 柱痕跡
　　2・3 掘方

P2　1 柱痕跡
　　2 掘方

P1　1・2 柱切取穴
　　3 柱痕跡
　　4・5 掘方

【南側柱列断面】



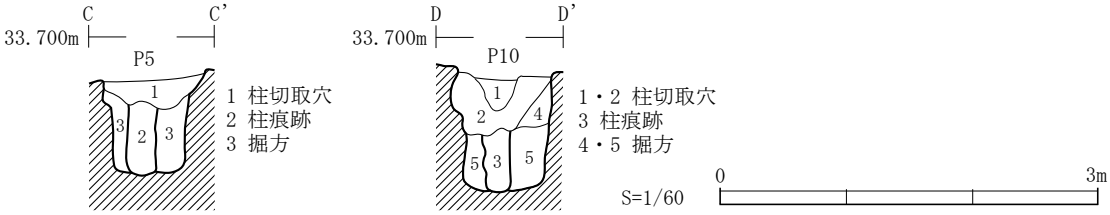
P9　1・2 柱切取穴
　　3 柱痕跡
　　4・5 掘方

P8　1・2 柱切取穴
　　3 柱痕跡
　　4・5 掘方

P7　1 柱切取穴
　　2 柱痕跡
　　3・4 掘方

P6　1 柱切取穴
　　2 柱痕跡
　　3・4 掘方

【棟通下柱穴】



P5　1 柱切取穴
　　2 柱痕跡
　　3 掘方

P10　1・2 柱切取穴
　　3 柱痕跡
　　4・5 掘方

第 11 図　SB152 平面・断面図

間は北から 1.72 m、1.76 mである。

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は北西隅柱穴（Ｐ１）で測ると、長辺 85 ㎝、短辺 65 ㎝、深さ 110 ㎝である。埋土は黒褐色土（10YR3/2）、暗褐色（10YR3/3）、にぶい黄褐色（10YR4/3）が主体であり、褐色土（10YR4/4）やにぶい黄橙色土（10YR7/2）が多く混入している。

【柱痕跡】直径 18 ～ 24 ㎝の円形である。北東隅柱（Ｐ４）を除きすべて切取穴を伴うが、比較的大きく掘り込まれた切取穴が確認されるものが多い（Ｐ１・５・６～ 10)。埋土は黒褐色土（10YR3/2）である。

ＳＢ 154 掘立柱建物跡（第 12 図）

【位置】調査区中央部、Ｓ 09 ～ 12、Ｗ 06 ～ 12 付近で発見した。

【桁行・梁行】南北１間、東西２間の南北棟建物跡である。

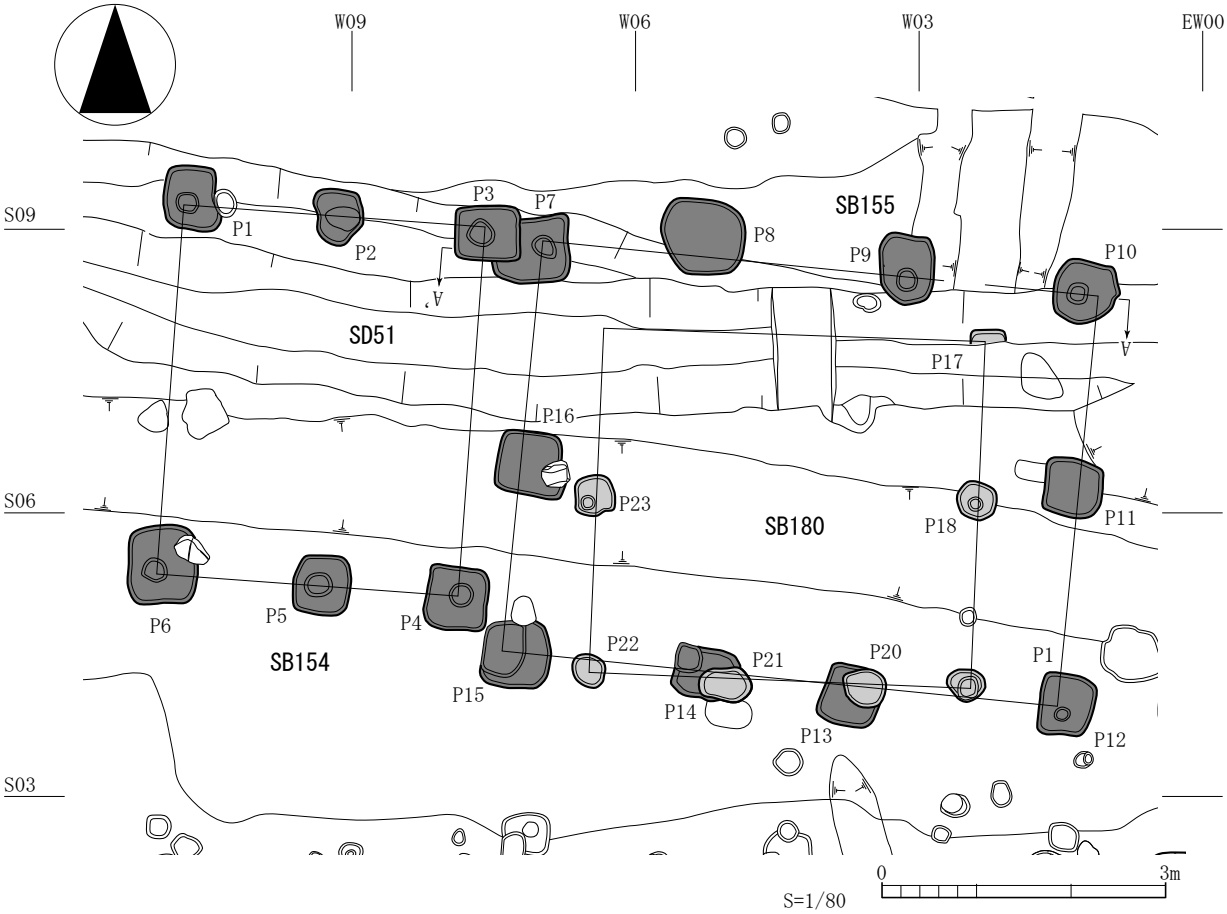
【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は６基（Ｐ１～６）検出しており、Ｐ２で柱抜取り穴、それ以外の柱穴で柱痕跡を確認した。

【重複】ＳＢ 155 と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は桁行（南側柱列）で測ると西で４度５分北に偏している。建物の規模は桁行が西側柱列で 3.88 m、梁行は南側柱列で総長 3.25 m、柱間は西から 1.73 m、1.52 mである。

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は南西隅柱穴（Ｐ６）で測ると、長辺 85 ㎝、短辺 75 ㎝、深さ 24 ㎝である。埋土は灰黄褐色（10YR4/2）または黒褐色土（10YR3/2）を主体とし､浅黄色の粘質土が小ブロック状に混入している。

【柱痕跡】直径 22 ～ 25 ㎝の円形であり、埋土は黒褐色土である。



第 12 図　SB154・155・180 ほか平面図

【柱抜取り穴】北妻棟通柱穴（Ｐ２）の中央部で確認した。埋土は、浅黄色粘質土が斑状に混入する黒褐色土（10YR2/3）や暗褐色土（10YR3/3）である。

ＳＢ 155 掘立柱建物跡（第 12・13 図）

【位置】調査区中央部、Ｓ 09 ～ 12、ＥＷ 00 ～ 06 付近で発見した。

【桁行・梁行】桁行３間、梁行２間の東西棟建物跡である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は 10 基（Ｐ７～ 16）検出しており、Ｐ７・９・10・12 で柱痕跡、Ｐ 14・15 で柱抜取り穴を確認した。

【重複】ＳＢ 154・180、ＳＤ 51 と重複し、それらよりも古い。

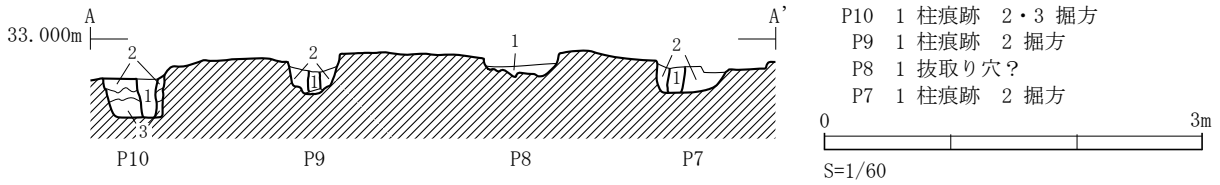
【方向・規模】方向は南側柱列で測ると西で５度 10 分北に偏している。建物の規模は桁行が北側柱列で総長 5.67 ｍ、柱間は西から約 1.7 ｍ、約 2.1 ｍ、1.87 ｍである。梁行は西妻で総長 4.3 ｍ、柱間は北から約 2.3 ｍ、約 2.0 ｍである。

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は南西隅柱穴（Ｐ 15）で測ると、１辺約 70 ㎝、深さ 40 ㎝である。埋土はにぶい黄褐色土（10YR4/3）や暗褐色土（10YR3/4）が主体であり浅黄色の粘質土や橙色土（7.5YR6/6）がブロック状に多く混入している。

【柱痕跡】直径 14 ～ 20 ㎝の円形であり、埋土はにぶい黄褐色及び暗褐色土である。

【柱抜取り穴】Ｐ 14・15 ともに柱穴西側で確認した。埋土はにぶい黄褐色土（10YR4/3）であり、明赤褐色土や黄橙色土が粒状に混入している。

【遺物】掘方埋土から、須恵器蓋が出土している。



第 13 図　SB155 断面図

ＳＢ 156 掘立柱建物跡（第 14・15 図）

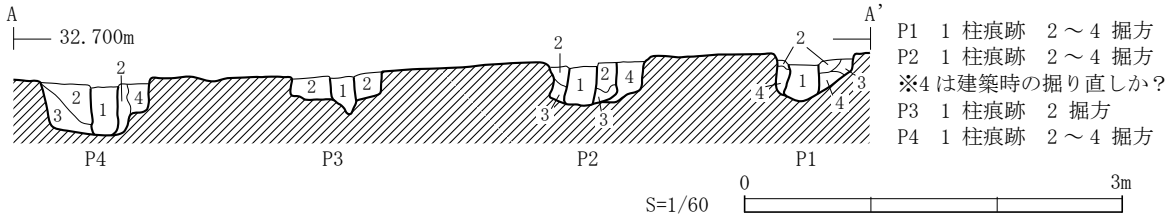
【位置】調査区中央部、Ｓ 15 ～ 18、ＥＷ 00 ～Ｅ 06 付近で発見した。

【桁行・梁行】桁行３間、梁行２間の東西棟建物跡である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は 10 基（Ｐ１～ 10）検出しており、すべての柱穴で柱痕跡を確認した。

【重複】ＳＢ 158 と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は北側柱列で測ると西で２度４分北に偏している。建物の規模は桁行が北側柱列で総長約 5.50 ｍ、柱間は西から 1.74m 、1.86 ｍ、1.90 ｍである。梁行は東側柱列で総長 4.46 ｍ、柱間は北から 2.20 ｍ、2.26 ｍである。



第 14 図　ＳＢ156 断面図

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は北東隅柱穴（Ｐ４）で測ると、長辺 85 ㎝、短辺 70 ㎝、深さ 48 ㎝である。埋土は褐色土（10YR4/4）、にぶい黄褐色土（10YR5/4）、明褐色土（7.5YR5/6）が主体であり、浅黄色土が粒状に混入している。

【柱痕跡】直径 15 ～ 24 ㎝の円形であり、埋土は褐色土（10YR4/4）やにぶい黄褐色土（10YR5/4）である。

【遺物】掘方埋土から、須恵器蓋が出土している。

ＳＢ 157 掘立柱建物跡（第 15 図）

【位置】調査区中央部、Ｓ 15 ～ 18、Ｅ 06 付近で発見した。

【桁行・梁行】梁行２間の東西棟建物跡と考えられる。

【柱痕跡･抜取り穴の有無】柱穴は梁行（西妻）で３基（Ｐ 11 ～ 13）を検出しており、Ｐ 12･13 で柱痕跡、Ｐ 11 であたり痕跡のある柱抜取り穴を確認した。

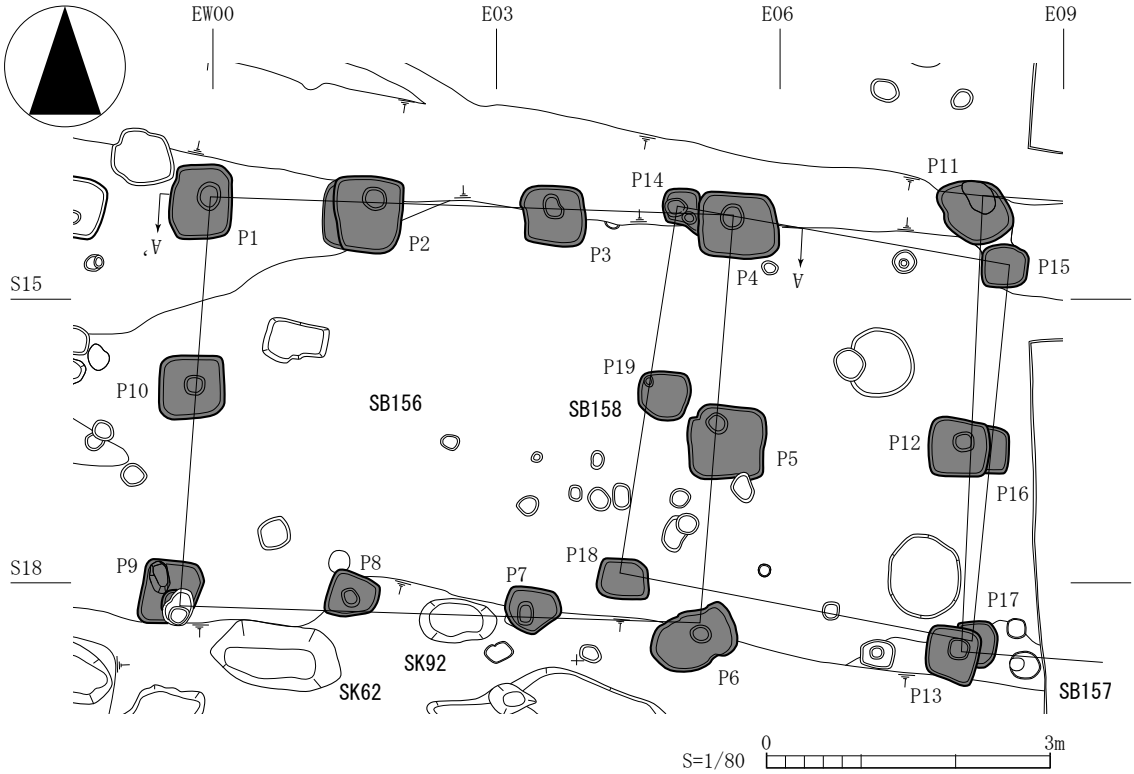
【重複】ＳＢ 158 と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約２度東に偏している。梁行は総長約 4.74 ｍ、柱間は北から 2.54 ｍ、2.20 ｍである。

【掘方】平面形は方形を基調とし､規模は棟通り下柱穴（Ｐ 12）で測ると、1 辺約 60 ㎝､深さ 48 ㎝である。埋土は黄褐色土（10YR5/6）や褐色土（10YR4/6）が主体であり、にぶい黄褐色土（10YR5/4）や灰白色土がブロック状に混入しているほか、炭化物が粒状に認められる。

【柱痕跡】直径 20 ～ 22 ㎝の円形であり、埋土はにぶい黄褐色土（10YR4/3）である。

【柱抜取り穴】柱穴の北側から掘り込まれており、南側であたり痕跡を確認した。埋土は炭化物が混入するにぶい黄褐色土（10YR4/3）である。



第 15 図　SB156・157・158 ほか平面図

ＳＢ 158 掘立柱建物跡（第 15 図）

【位置】調査区中央部、Ｓ 15 ～ 18、Ｅ 06 付近で発見した。

【桁行・梁行】桁行２間、梁行１間の南北棟建物跡である。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は６基（Ｐ 14 ～ 19）検出しており、Ｐ 14・19 で柱痕跡を確認した。

【重複】ＳＢ 156・157 と重複し、それらよりも古い。

【方向・規模】方向は西妻で測ると北で約８度東に偏している。建物の規模は桁行が西側柱列で総長約 4.0 m、柱間は北から約 2.0 m、約 2.0 mである。梁行は北妻で約 3.5 mである。

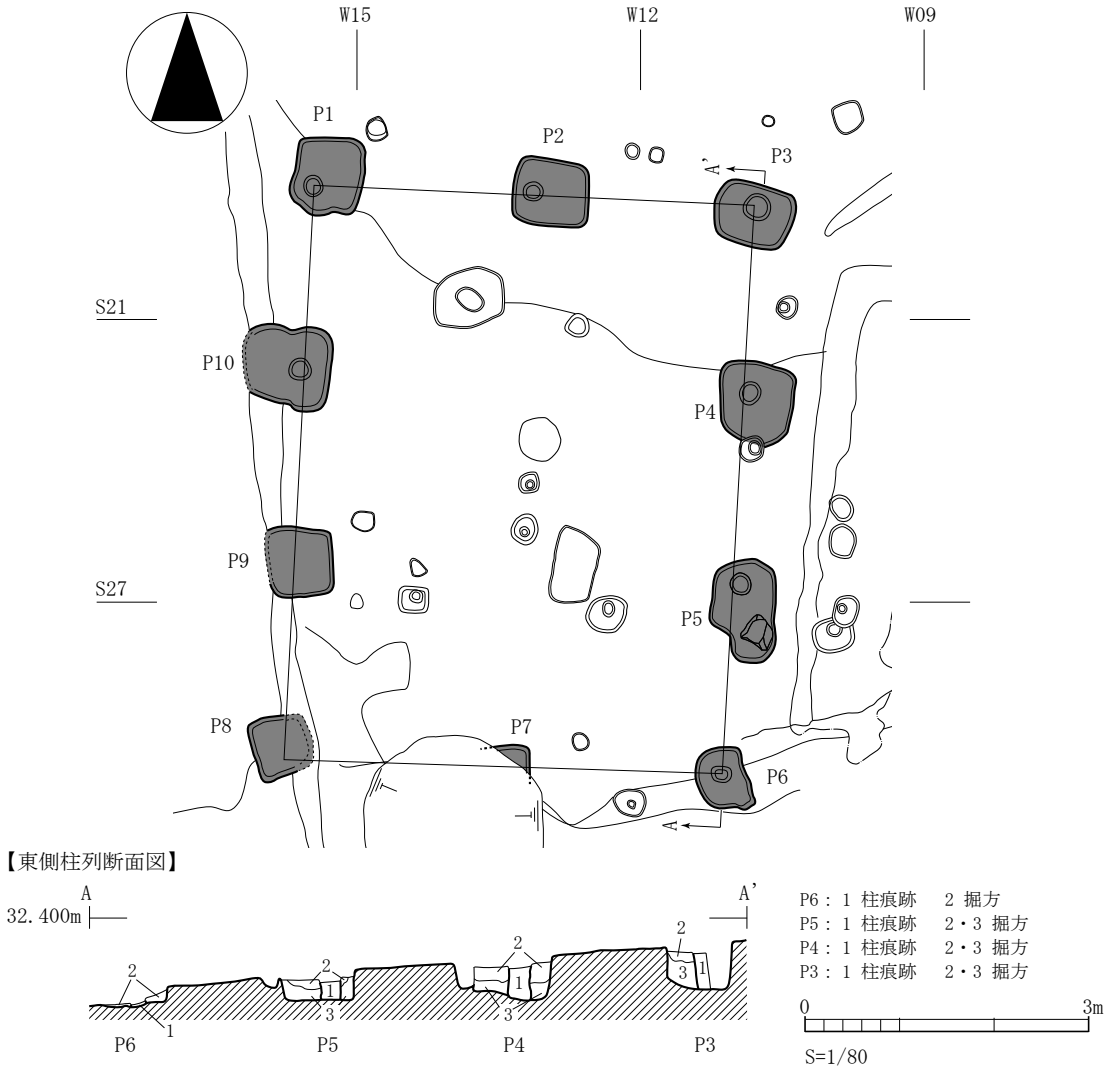
【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は南西隅柱穴（Ｐ 18）で測ると、長辺 50 ㎝、短辺 40 ㎝、深さ 30 ㎝である。埋土はにぶい黄褐色土（10YR5/4）や暗褐色土（10YR4/4）が主体であり､灰白色粘質土がブロック状に混入しているほか、炭化物粒も認められる。

【柱痕跡】直径 18 ㎝の円形であり、埋土はにぶい黄褐色土（10YR4/3）である。

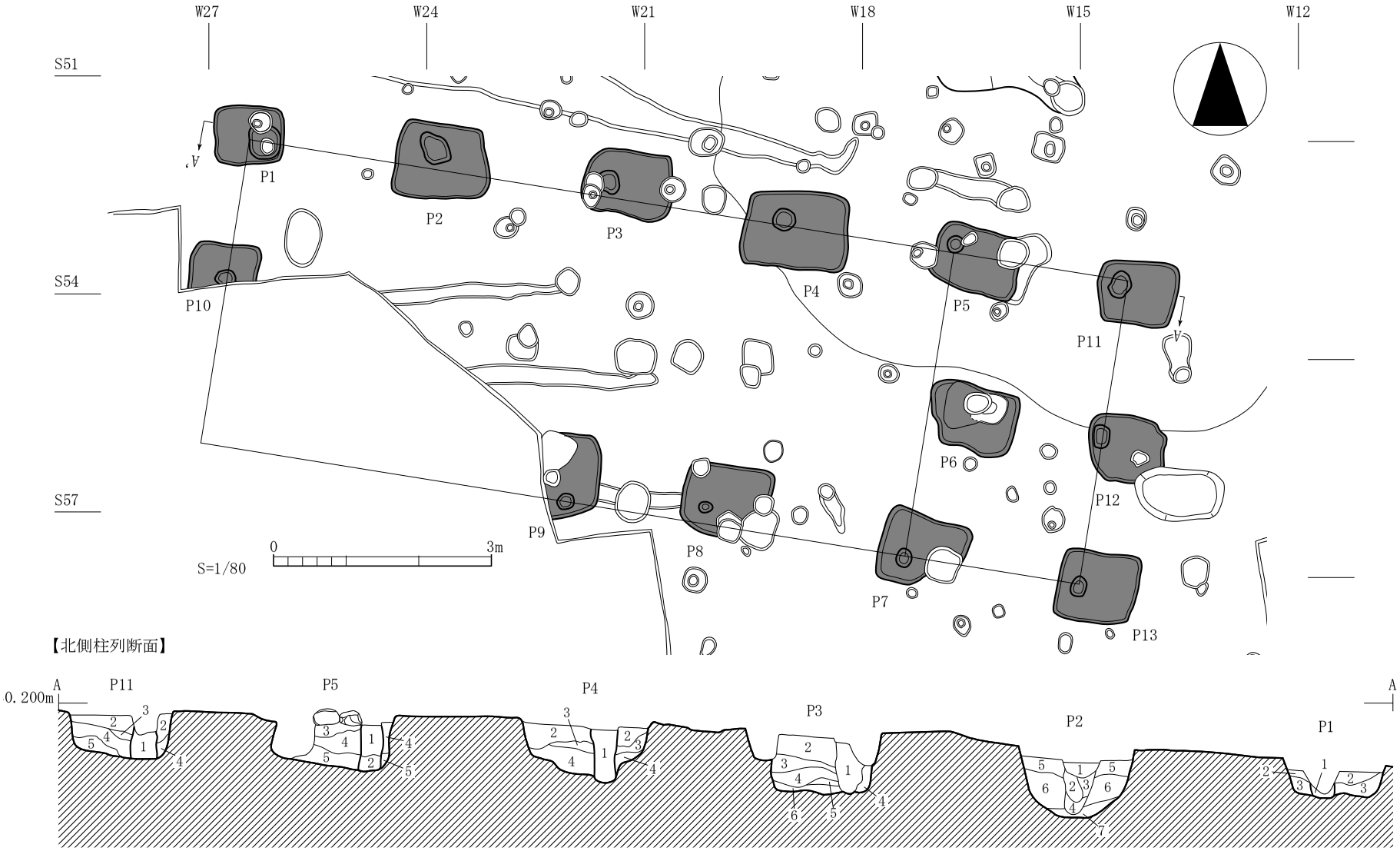
ＳＢ 159 掘立柱建物跡（第 16 図）

【位置】調査区中央部、Ｓ 18 ～ 30、Ｗ 09 ～ 15 付近で発見した。

【桁行・梁行】桁行３間、梁行２間の南北棟建物跡である。



第 16 図　ＳＢ159 平面・断面図



第 17 図　SB164 平面・断面図

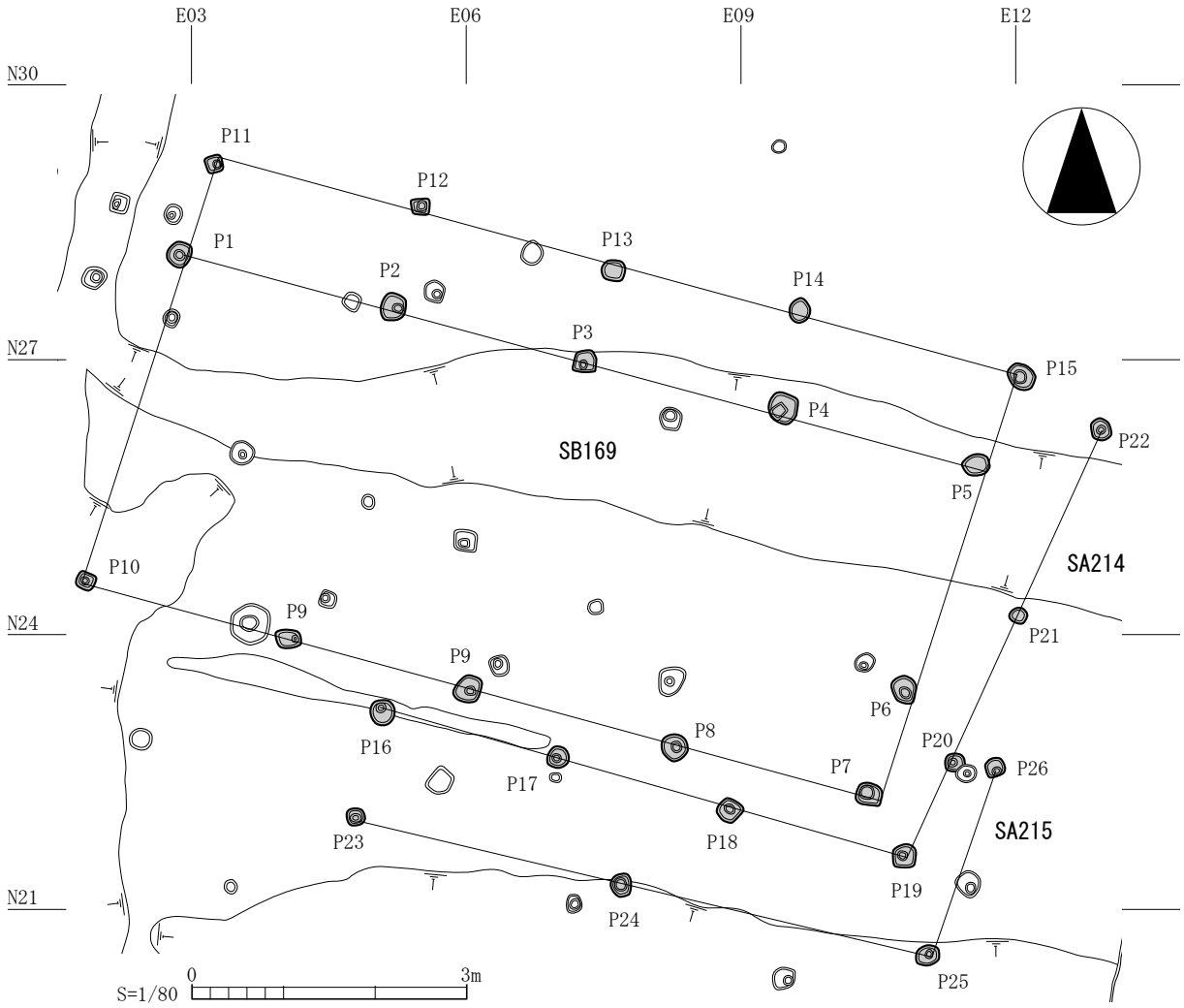
【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は 10 基（Ｐ１～10）検出しており、Ｐ１～６・10 で柱痕跡を確認した。
【重複】ＳＢ 181・183 と重複するが、直接的な新旧関係は確認できない。
【方向・規模】方向は東側柱列で測ると北で３度 28 分東に偏している。建物の規模は桁行が東側柱列で総長 6.02 ｍ、柱間は北から 1.98 ｍ、2.02 ｍ、2.02 ｍである。梁行は北側柱列で総長 4.68 ｍ、柱間は西から 2.30 ｍ、2.30 ｍである。
【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は北妻棟通り下柱穴（Ｐ２）で測ると、長辺 80 ㎝、短辺 70 ㎝、深さ 46 ㎝である。埋土は褐色土（10YR4/6・4/4）または暗褐色土（10YR3/3）が主体であり、地山ブロックや粘質土ブロックが多く混入している。
【柱痕跡】直径 20 ～ 30 ㎝の円形であり、埋土は暗褐色土（10YR3/3）である。
【柱痕跡】直径 14 ～ 28 ㎝の円形であり、埋土は灰黄褐色土（10YR4/2）である。

ＳＢ 164 掘立柱建物跡（第 17 図）

【位置】調査区南部、Ｓ 51 ～ 57、Ｗ 12 ～ 27 付近で発見した。
【桁行・梁行】桁行４間、梁行２間の東西棟建物跡であり、東側に１間分の廂が取り付く。
【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は 13 基（Ｐ１～ 13）検出しており、Ｐ１・４・５・７～ 13 で柱痕跡、その他の柱穴で柱抜取り穴を確認した。
【重複】ＳＢ 196・198 と重複するが、直接的な新旧関係は不明である。
【方向・規模】方向は北側柱列で測ると西で９度０分北に偏している。建物の規模は身舎北側柱列で測ると桁行が北側柱列で総長 9.65 ｍ、柱間は西から約 2.4 ｍ、約 2.4 ｍ、2.42 ｍ、2.43 ｍである。梁行は東側柱列で総長 4.38 ｍ、柱間は北から約 2.3 ｍ、約 2.1 ｍである。また、東側の廂の出は 2.41 ｍである。
【掘方】平面形は方形を基調とし、規模はもっとも大規模な北側柱列西から３間目柱穴（Ｐ４）で測ると、長径 150 ㎝､短径 110 ㎝､深さ 68 ㎝である。埋土は黄褐色土（10YR5/6）や褐色土（10YR4/4）が主体であり、黒褐色土（10YR3/2）が小ブロック状または斑状に多く混入している。
【柱痕跡】直径 24 ～ 28 ㎝の円形である。埋土は黒褐色土（10YR3/2）であり、褐色土（10YR4/4）や炭化物粒が若干混入している。
【柱抜取り穴】Ｐ２・３で確認した。平面では柱痕跡状に認められるが、埋土の状況や断面の形状から柱抜取り穴と判断した。埋土は黒褐色土（10YR3/2）が主体であるが、褐色土が多く混入している。

【ＳＢ 169 掘立柱建物跡（第 18 図）

【位置】調査区北部、Ｎ 21 ～ 30、ＥＷ 03 ～ 12 付近で発見した。
【桁行・梁行】桁行４間、梁行１間の東西棟建物跡であり、北側に１間分の廂が取り付く。
【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は 15 基（Ｐ９～ 16）検出しており、Ｐ１～４・６・８～ 13・15 で柱痕跡確認した。
【方向・規模】方向は南側柱列で測ると西で約 15 度北に偏している。建物の規模は身舎南側柱列で測ると桁行が総長約 8.8 ｍ、柱間は西から 2.38 ｍ、2.00 ｍ、2.35 ｍ、約 2.1 ｍである。梁行は東側柱列で約 3.8 ｍ（２間分）であり、南東隅柱穴より北側約 1.2 ｍの位置にも柱が設けられている。北側柱列の廂の出は１～ 1.08 ｍである。
【掘方】平面形は方形または楕円形を基調とし、規模は北西隅柱穴（Ｐ１）で測ると、直径 25 ㎝、深さ 20 ㎝である。埋土は明黄褐色土（10YR6/8）や黄褐色土（10Y5/6)､褐色粘質土（7.5YR4/6）が主体であり、



第 18 図　ＳＢ169 ほか平面図

浅黄色の粘質土が小ブロック状に多く混入している。

【柱痕跡】直径８～ 12 ㎝の円形であり、埋土は粘性のある暗褐色土（10YR3/4）である。

ＳＢ 170 掘立柱建物跡（第 19 図）

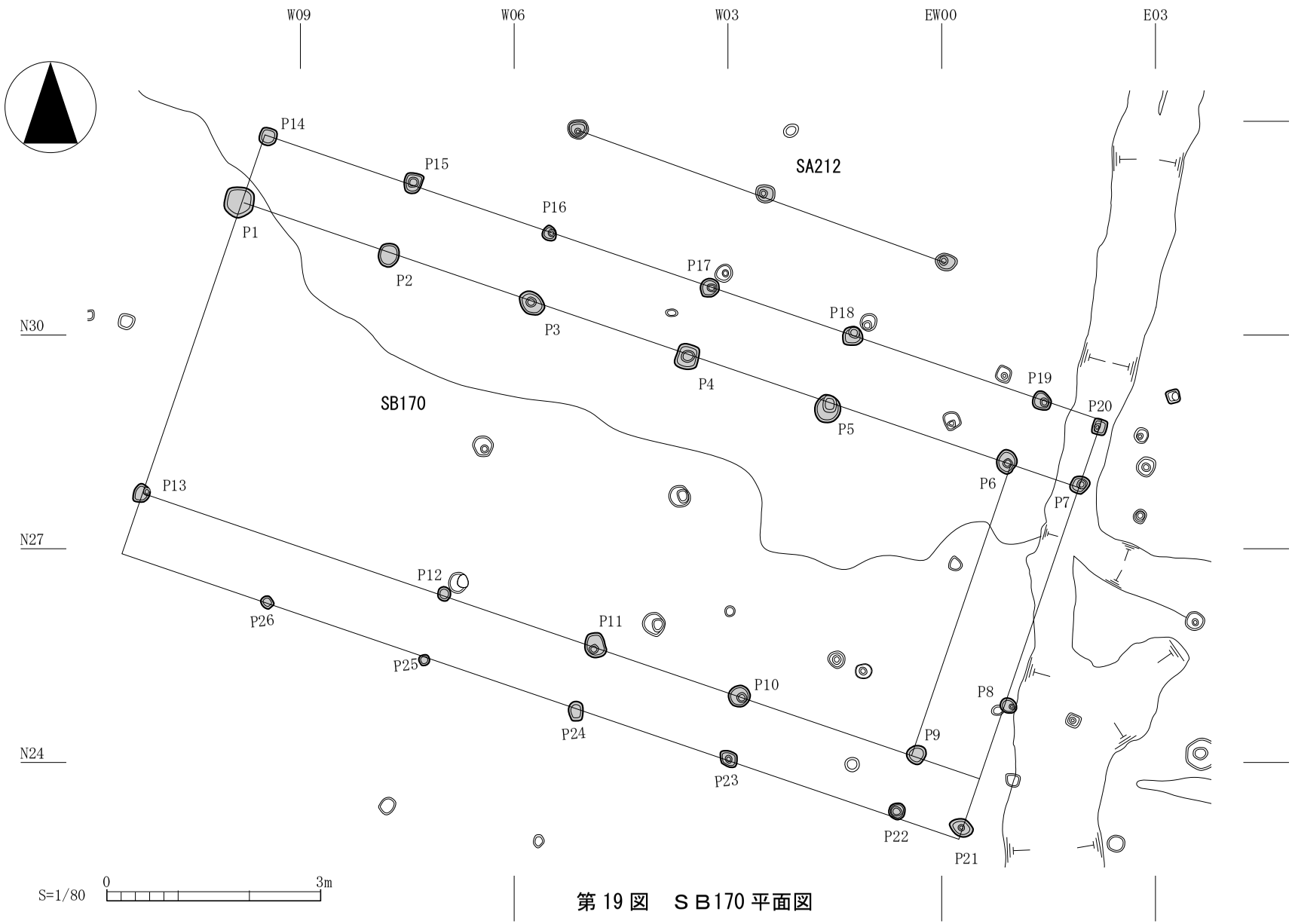
【位置】調査区北部、Ｎ 24 ～ 33、Ｅ 03 ～Ｗ 09 付近で発見した。

【桁行・梁行】桁行５間、梁行１間の東西棟建物跡であり、西側を除く各側柱に１間分の廂が取り付く。

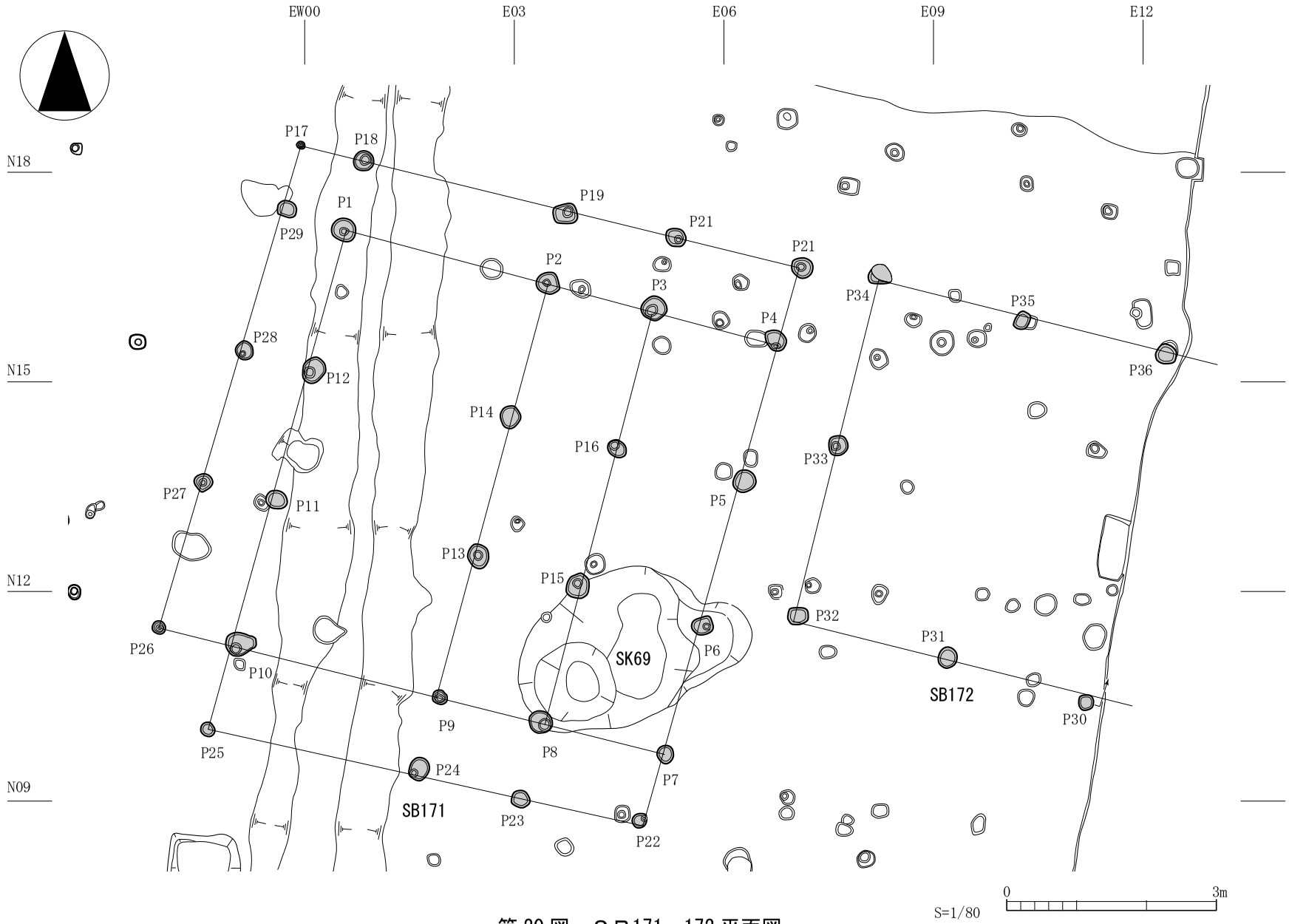
【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は 26 基（Ｐ１～ 26）検出しており、Ｐ３～８・10・11・15 ～ 23 で柱痕跡を確認した。

【方向・規模】方向は南側柱列で測ると西で約 19 度北に偏している。建物の規模は身舎北側柱列で測ると桁行が総長約 11.4 ｍ、柱間は西から約 2.2 ｍ、約 2.1 ｍ、2.32 ｍ、2.13 ｍ、2.64 ｍである。梁行は東側柱列で約 4.4 ｍ（２間分）である。各側柱からの廂の出は、北側で約１ｍ、東側で１～ 1.1 ｍ、南側で約 0.9 ｍである。

【掘方】平面形は方形または楕円形を基調とし、規模は身舎北西隅柱穴（Ｐ１）で測ると、直径 40 ㎝、深さ 40 ㎝である。埋土は黄褐色土（10YR5/6）が主体であり、浅黄色の粘質土が小ブロック状に多く混入しているほか、僅かに炭化物粒も認められる。



第 19 図　ＳＢ170 平面図



第 20 図　ＳＢ171・172 平面図

【柱痕跡】直径 10 ～ 14 ㎝の円形であり、埋土は粘性のある暗褐色土（10YR3/4）である。

ＳＢ 171 掘立柱建物跡（第 20 図）

【位置】調査区北部、Ｎ 09 ～ 18、ＥＷ 00 ～Ｗ 09 付近で発見した。

【桁行・梁行】桁行３間、梁行３間の東西棟建物跡であり、東側を除く各側柱に１間分の廂が取り付く。身舎内は西半部が東西２間分の広い空間を有しているのに対して、東半部は総柱となっている。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は 29 基（Ｐ１～ 29）検出しており、Ｐ１～４・６・８～ 10・12・13・15・16・18 ～ 22・24・26 ～ 28 で柱痕跡を確認した。

【方向・規模】方向は北側柱列で測ると西で約 15 度北に偏している。建物の規模は身舎北側柱列で測ると桁行が総長 6.39 ｍ、柱間は西から 2.99 ｍ、1.55 ｍ、1.85 ｍである。梁行は西側柱列で総長 6.18 ｍ、柱間は北から 2.09 ｍ、約 1.9 ｍ、約 2.2 ｍである。各側柱からの廂の出は、北側で 1.05 ～ 1.15 ｍ、南側で１～ 1.3 ｍ、西側で 0.9 ～ 1,15 ｍである。

【掘方】平面形は方形または楕円形を基調とし、規模は身舎北西隅柱穴（Ｐ１）で測ると、直径 35 ㎝、深さ 40 ㎝である。埋土は明黄褐色土（10YR7/6）や明褐色（7.5Y5/6・5/8）が主体であり、浅黄色の粘質土が小ブロック状に多く混入している。

【柱痕跡】直径 8 ～ 14 ㎝の円形であり、埋土は粘性のある暗褐色土（10YR3/4）またはにぶい褐色（7.5YR5/4）である。

ＳＫ 57 土壙（第 21 図）

【位置】調査区中央部、Ｓ 15、Ｗ 12 ～ 15 付近で発見した。

【重複】他の遺構との重複はない。

【平面形・規模】東西にやや長い、不整形の土壙である。規模は東西約３ｍ、南北最大２ｍ、深さは約 20 ㎝である。

【壁・底面】壁は非常に緩やかに立ち上がっている。底面は起伏が著しく、南に向かって低くなっている。

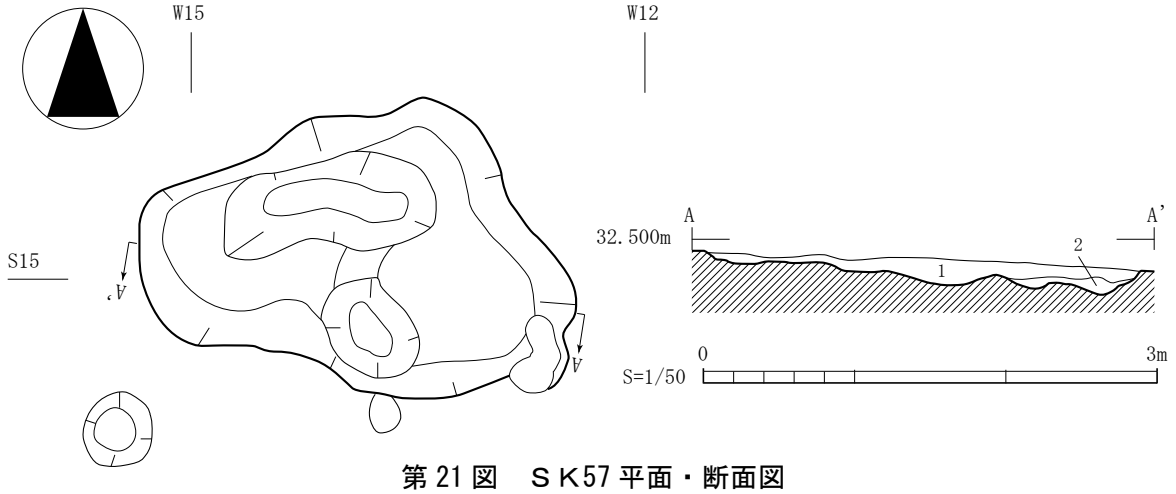
【遺物】土師器坏（ＢⅠ・ＢⅡ・ＢⅡＣ類）・甕（Ａ類）、須恵器坏（Ⅲ・Ⅴ類）・高台付杯が出土している。

ＳＸ 54 石敷遺構（第 22 図）

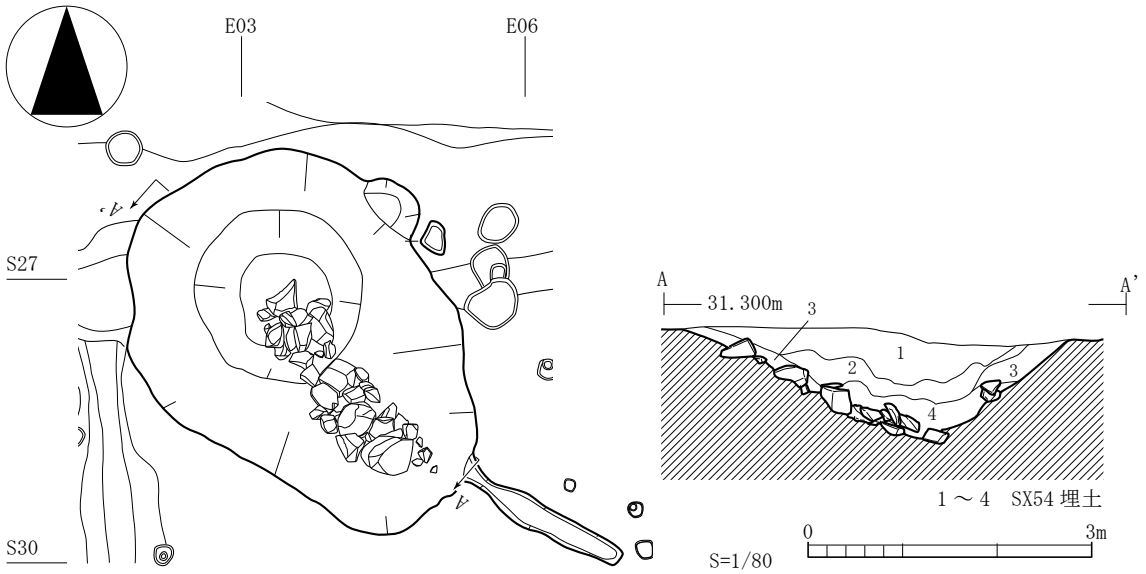
【位置】調査区南部、Ｓ 27 ～ 30、Ｅ 03 ～ 06 付近で発見した。

【重複】他の遺構との重複はない。

【平面形・規模】南北に長い楕円形の土壙南東隅に、南北方向の溝が取り付く。土壙の規模は南北 4.4 ｍ、



第 21 図　ＳＫ57 平面・断面図



第 22 図　ＳＸ54 石敷遺構平面・断面図

東西３ｍ、深さは約 1.1 ｍである。南北方向の溝は長さ 1.9 ｍ、幅 14 ～ 32 ㎝である。

【壁・底面】壁は中央から北側中位付近かけて段が設けられており、下方がやや急角度に、上方が非常に緩やかに立ち上がっている。底面はやや丸みを帯びて窪んでいる。また、長径中軸付近には、南端から中央底面にかけて石敷きの階段状施設が設けられている。石敷きの範囲は長さ 2.4 ｍ、幅 0.7 ｍである。

【遺物】古瀬戸後期様式の天目茶碗が出土している。

ＳＸ 121 性格不明遺構（第 23 図）

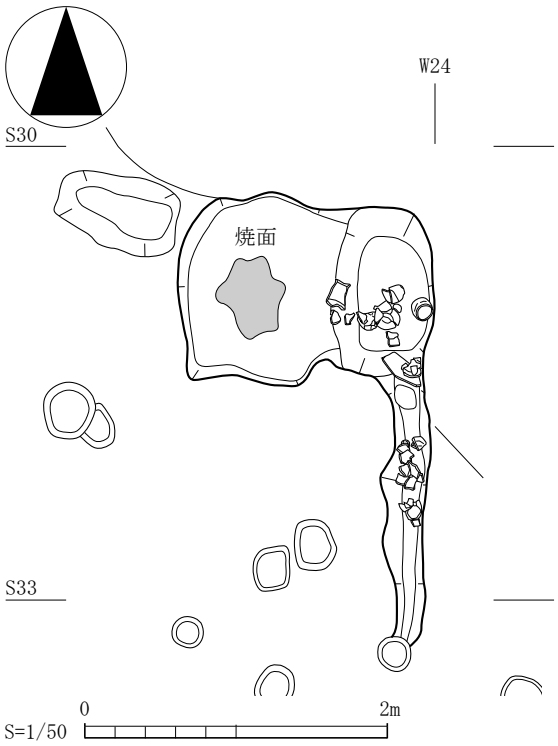
【位置】調査区南部、Ｓ 30 ～ 33、Ｗ 24 付近で発見した。

【重複】ＳＢ 191 と重複するが、直接的な新旧関係は確認できない。

【平面形・規模】東西に長い方形の土壙南東隅に、南北方向の溝が取り付いている。土壙の規模は東西 1.7 ｍ、南北 1.3 ｍ、深さは西半部が 4 ㎝、東半部が 24 ㎝である。南北方向の溝は長さ 1.8 ｍ、幅 18 ～ 30 ㎝である。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がっており、底面はおよそ平坦である。なお、西半部の底面中央で焼け面を確認した。

【遺物】土師器甕（Ｂ類）、多口瓶、須恵器坏（Ｖ類）、須恵系土器坏・高台付杯が出土している。このうち多口瓶は、外面へラミガキ後黒色処理が施されている。



第 23 図　ＳＸ121 平面図

ＳＤ 51 溝跡（第 24 図）

【位置】調査区中央部、Ｓ 09、Ｗ 18 ～Ｅ 09 付近で発見した東西方向の溝跡である。

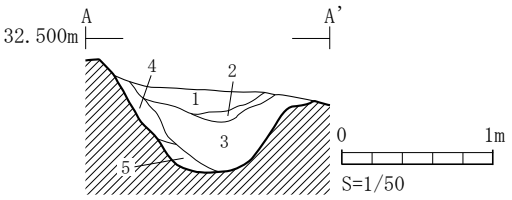
【重複】ＳＢ 154・155・180、ＳＫ 73 と重複し、それらよりも新しい。

【方向・規模】およそ西で 3 度北に偏している。規模は

長さ25.6ｍ以上、上幅約1.3ｍ、下幅0.25～0.6ｍ、深さは東端部で0.8ｍである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がっており、底面は丸みを帯びて窪んでいる。東西の比高は標高地で測ると48㎝であり、東側に向かって傾斜している。

【遺物】瓦質土器擂鉢、茶臼が出土している。



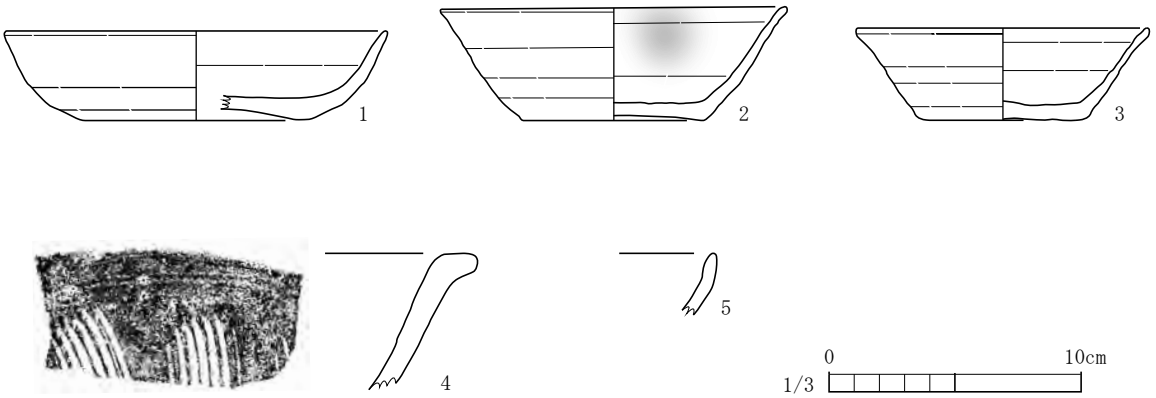
第24図　ＳＤ51断面図

４　まとめ

（１）遺構の年代

今回の調査では、竪穴住居跡３軒、掘立柱建物跡46棟のほか、多数の土壙や溝跡、柱穴を発見した。このうち、竪穴住居跡と掘立柱建物跡の重複関係については、ＳＩ141→ＳＢ152、ＳＩ142→ＳＢ181、ＳＩ143→ＳＢ188など、いずれも掘立柱建物跡が竪穴住居跡よりも新しいことが明らかである。一方、掘立柱建物跡は、一辺60㎝以上の方形主体の掘方のものと（ａ群）、直径30～40cmほどの方形または楕円形主体の掘方のもの（ｂ群）の２種類に大別することができる。これら建物跡の重複関係をみると、ＳＢ152（ａ群）→ＳＢ177（ｂ群）ＳＢ155（ａ群）→ＳＢ180（ｂ群）、ＳＢ196（ａ群）→ＳＢ196･198（ｂ群）であり、ａ群→ｂ群の新旧関係が確認できる。

次に、竪穴住居跡から出土した遺物を見ると、ＳＩ142では周溝に多数の瓦が敷設されており、平瓦ＩＡ類１点、ⅡＢａ類13点（Ａａタイプ１が９点、Ｂａタイプ２が４点）、ⅡＢｂ類２点、丸瓦Ⅱｂ類ａタイプ15点が確認できる。土器類では、周溝から須恵器坏Ⅲ類２点、住居内埋土から土師器坏ＢⅡ類１点、



番号	種類	遺構 層位	特　徴		口　径 残存率	底　径 残存率	写真 図版	登録 番号	備　考
			外　面	内　面					
1	須恵器 坏	SI142 住居内埋土	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(15.1) 9/24	(8.2) 8/24	－	R90	Ⅴ類
2	須恵器 坏	SI143 住居内埋土	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	13.6 22/24	7.2 24/24	－	R22	Ⅴ類、油煙付着
3	須恵器 坏	SI143 住居内埋土	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(11.6) 3/24	6.6 24/24	－	R22	Ⅲ類
4	瓦質土器 擂鉢	SD51・１層	ロクロナデ	ロクロナデ 卸目	－	－	－	R89	
5	施釉陶器 天目茶碗	SK54・１層	鉄釉	鉄釉	－	－	2-2	R88	

第25図　各遺構出土遺物

須恵器坏Ⅱ類１点、Ⅴ類１点がある。平瓦にⅡＢｂ類があることから、政庁Ⅲ期以降と考えられる。出土した土器も土師器坏にＢ類が含まれていることから８世紀後葉以降のものであり、瓦の年代と矛盾するものではない。

ＳＩ 143 では、主柱穴掘方から土師器坏ＢⅡ類１点、周溝から土師器坏ＢⅡ類２点、土壙４から土師器坏ＢⅤ類１点、住居内埋土から土師器坏ＢⅡ類２点、ＢⅤ類１点、土師器甕Ａ類１点、土師器甕Ｂ類１点、須恵器坏Ⅲ類５点、Ⅴ類１点、平瓦ＩＡ類１点、ⅡＢ類３点が出土している。点数は少ないものの、土師器では再調整が施されたものが約７割、須恵器ではⅢ類が８割以上を占めていることや、１点のみではあるが土師器甕Ａ類が混在している状況は、市川橋遺跡ＳＸ 1351 Ｃ・Ｄ期や同遺跡ＳＤ 1522 出土土器群と類似しており、およそ９世紀前葉から中葉頃のものと考えられる。

ＳＩ 141 ではＢ期床面から土師器甕Ａ類２点、住居内埋土から土師器甕Ａ類１点、須恵器坏Ⅱａ類２点が出土している。出土点数は非常に少ないものの、土師器甕Ｂ類が認められないことを考慮すれば、８世紀後葉まで下らない可能性もある。

掘立柱建物跡ａ群については出土遺物がほとんどなく年代については明らかではないが、同様の建物跡は古代に多く認められるものである。このうち、ＳＢ 152 はＳＩ 141 との重複関係から８世紀後葉～９世紀初頭頃を上限と捉えることができ、今回発見した建物跡ａ群の年代の一端を示すものと考えられる。また、建物跡ａ群には、ＳＢ 155 →ＳＢ 154、ＳＢ 158 →ＳＢ 156、ＳＢ 161 →ＳＢ 160 などの新旧関係があり、少なくとも２小期に細分することができる。一方、調査区西端部で確認したＳＸ 121 では須恵系土器坏が７点出土している。10 世紀後半以降に出現するとされている小型坏・皿が確認されないものの、市川橋遺跡ＳＫ 565 土壙（多賀城市教育委員会 1993）に認められるような小型の埦状の坏（写真図版２－３）が出土しており、10 世紀中葉頃のものと考えられる。今回発見した古代の遺構群の中では最も新しく、上述した建物跡ａ群の中にもこの頃まで下るものが存在する可能性もある。ＳＫ 57 からは土師器坏ＢＩ類２点、ＢⅡ類２点、ＢⅡＣ類１点、土師器甕Ａ類１点、須恵器坏Ⅲ類３点、Ⅴ類３点が出土している。土師器坏では再調整が施されるものに限られることや甕Ａ類が認められること、須恵器坏ではⅢ・Ⅴ類が同数であることから、８世紀後葉～９世紀前葉頃の土器群の範疇におさまるものと考えられる。

掘立柱建物跡ｂ群もａ群同様出土遺物がなく、年代については明らかではない。柱穴の規模は 30 ～ 40cm と小さく、平面形は方形または楕円形を基調としている。このような柱穴は、本市内の遺跡では中・近世以降の建物跡に多く認められるものである。近世以降の出土遺物がほとんどないことから、およそ中世の範疇に収まるものと考えておきたい。一方、今次調査で出土した中世の遺物を見ると、ＳＤ 51 から東北南部でＡ類とされている瓦質土器擂鉢（高桑 2003）や茶臼、ＳＸ 54 から古瀬戸窯後期様式の編年（藤沢 2008）でⅢ期のものと口縁形体が近似する天目茶碗がある。瓦質土器擂鉢は 15 世紀、天目茶碗は 15 世紀前半頃のものであることを考慮すれば、建物跡ｂ群の年代もおよそ同時期またはそれ以降と捉えておきたい。

（２）各時期の様相

上述したように、今回発見した遺構は８世後葉～ 10 世紀前葉頃の古代のものと、15 世紀以降の中世のものに大別することができた。ここでは、前者をＩ期、後者をⅡ期とし、各時期の様相についてまとめる。

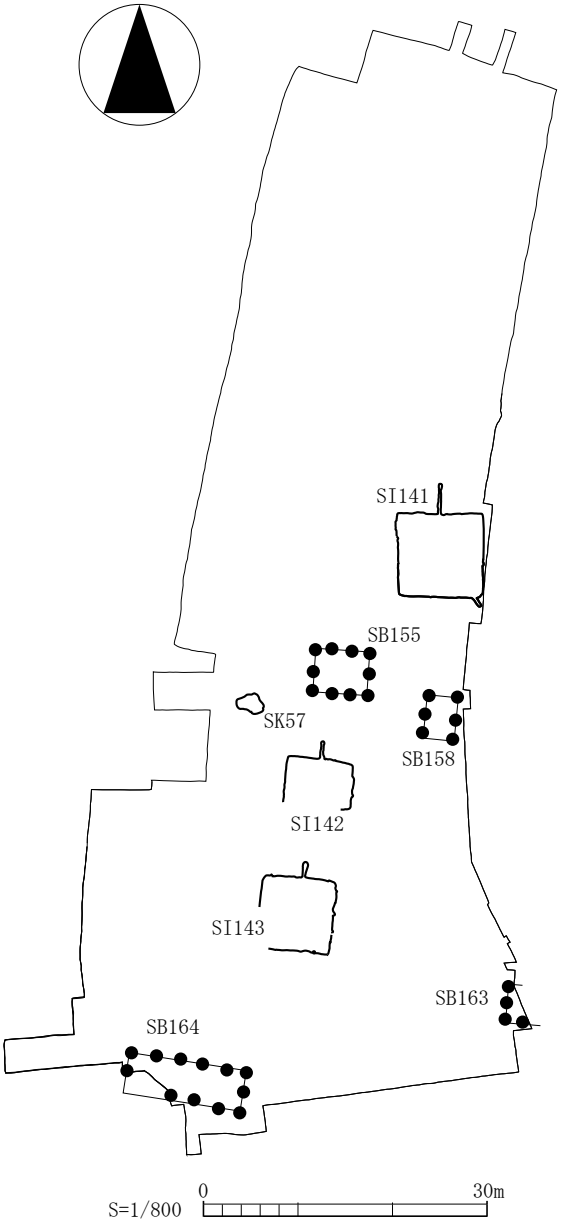
【Ｉ期】（第 26・27 図）

竪穴住居跡４軒と掘立柱建物跡ａ群13棟が建設される時期である。ＳＩ 141→ＳＢ 152の重複関係より、

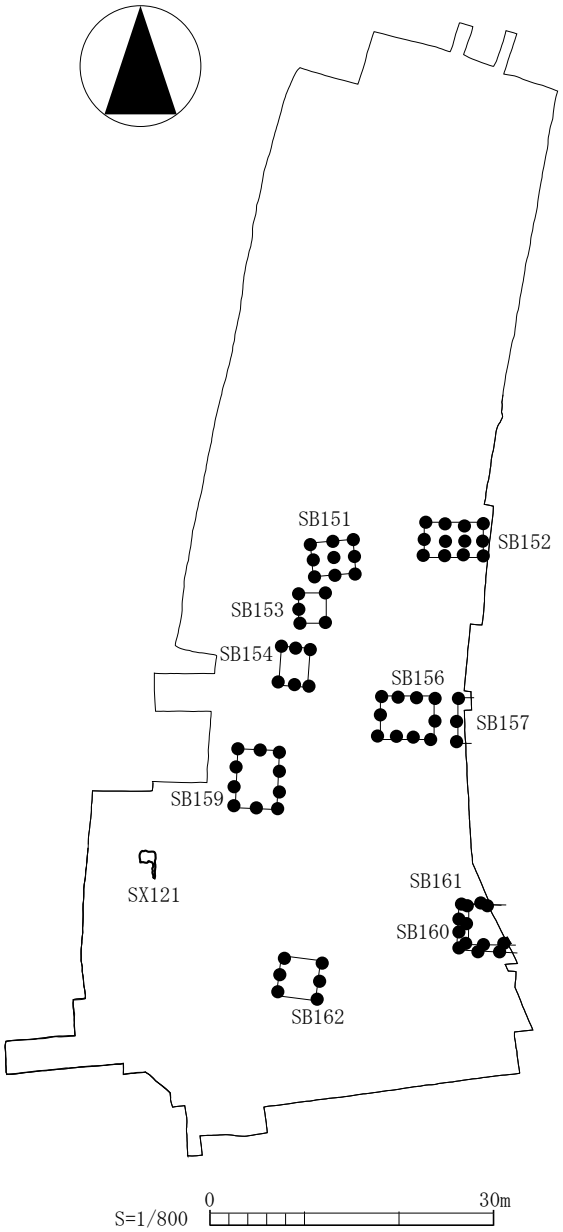
竪穴住居跡→掘立柱建物跡ａ群の変遷も考えられるが、後述するように竪穴住居と近似した方位を取る建物跡もあることから、両者が同時存在していた時期も想定される。これら遺構群は、調査対象となった丘陵の中央から南側に展開しており、北側では同時期のものは確認できない。

竪穴住居跡は、発掘基準線と方向がおよそ一致するものが２軒（ＳＩ 141・144）、北で東に傾くものが２軒（ＳＩ 142・143）ある。このうち、ＳＩ 142・143 は東辺をおよそ揃えて設けられていることから、同時期に存在した可能性が高い。出土した遺物もＳＩ 142 が８世紀後葉以降、ＳＩ 143 が９世紀前葉から中葉頃であることから、年代的にも矛盾するものではない。このことから、竪穴住居跡は中央部のＳＩ 144・141 が８世紀代に先行して設けられ、廃絶後の８世紀後葉～９世紀前葉頃にＳＩ 142・143 が機能していたものと考えられる。

建物跡は、発掘基準線と一致するものが２棟（ＳＢ 152・153）、北で西に傾くものが１棟（ＳＢ 151）、それ以外は全て北で東に傾くものである。東に傾く建物跡のなかには、北で東に６～８度傾くＳＩ 142・



第 26 図　ＩＡ･Ｂ期（古代）遺構模式図



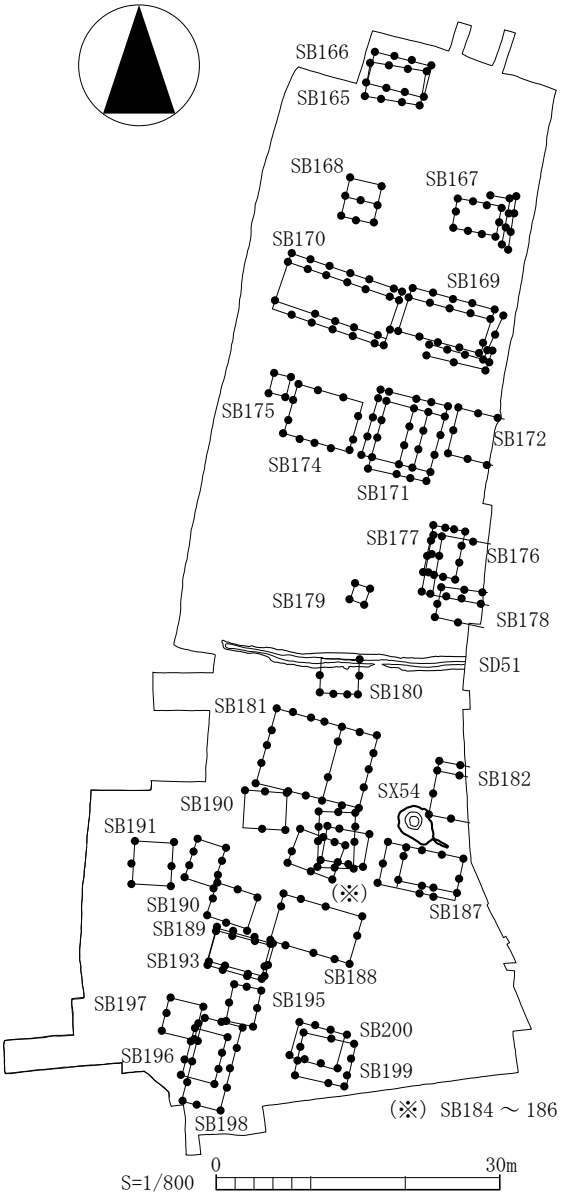
第 27 図　ＩＣ期（古代）遺構模式図

143 と近似した方位を示すものもが４棟あり（北で５～９度東に傾くもの：ＳＢ 155・158・163・164)、このうちＳＢ 155・158 は建物跡ａ群内の新旧関係では最も古いものである。傾きが近似する点を重視すれば、これら建物跡はＳＩ 142・143 と同時期に存在していたものと捉えておきたい。一方、新旧関係でこれら建物跡よりも新しいＳＢ 154・156・157 は北で２～４度東に傾くものであり、古い建物群よりも真北を意識している傾向が認められる。ＳＢ 151 ～ 153・159 ～ 161 も近似した値を示していることから、これらは建物跡ａ群の中では後出的な建物跡と考えられる。

【Ⅱ期】（第 28 図）

掘立柱建物跡ｂ群 33 棟と、溝跡、石敷き遺構がある。中央部のＳＤ 51 を境に、建物跡が規則的に配置され建て替えがさほど認められない北側の区画と、何度も建て替えが行われている南側の区画に大別できる。建物として組み合わせることができない柱穴も南側の区画が圧倒的に多く、南東部を除き建物の重複関係がない北側の区画とは対照的である。

一方、両区画の建物跡は北で東に 10 ～ 20 度前後傾くものがほとんどであり、方向に統一性が認められることから､両区画は同時期に機能していたものと考えている。しかし、廂や間仕切りと考えられる柱を据え、塀を設けるものが多く確認される北側の区画に対して、南側の区画は北側よりもやや小規模な側柱の建物が主体となっており、南北で階層差が存在していた可能性も指摘できよう。



第 28 図　Ⅱ期（中世）遺構模式図

【参考文献】
高桑弘美「瓦質土器」『中世奥羽の土器・陶磁器』 2003
藤沢良祐『中世瀬戸窯の研究』 2008
多賀城市教育委員会『市川橋遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第 35 集　1994
多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－』多賀城市文化財調査報告書第 70 集　2003

調査区中央付近（南より）

ＳＸ 54 石敷遺構（北東より）

ＳＸ 121 性格不明遺構（北より）

1

土師器多口瓶（ＳＸ 121）

2

天目茶碗（ＳＸ 54）

3

須恵系土器坏（ＳＸ 121）

4

須恵系土器坏（ＳＸ 121）

5

平瓦・刻印「物」（ＳＩ 142 出土）

6

丸瓦・刻印「田」（ＳＩ 142 出土）

写真図版２

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たがじょうしないのいせき１
書 名	多賀城市内の遺跡１
副 書 名	西沢遺跡第２次調査の概報
シ リ ー ズ 名	多賀城市文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第134集
編 著 者 名	武田健市
編 集 機 関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒985-0873　宮城県多賀城市中央二丁目27－１　℡：022-368-0134
発 行 年 月 日	西暦２０１７年３月２４日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
西沢遺跡 （第24次）	宮城県多賀城市 浮島字西沢70、71、74、76番	04209	18017	38度 18分 28秒	140度 59分 39秒	19940425 ～ 19941221	3.735 ㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西沢遺跡 （第２次）	集落	古代 中世	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・土壙	土師器・須恵器・須恵系土器 瓦・施釉陶器・瓦質土器	

要 約	・古代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などを発見した。これら遺構には、８世紀後葉以前、８世紀後葉～９世紀中葉頃、９世紀中葉～１０世紀中葉頃の３時期の変遷があることを確認した。 ・中世では、屋敷跡を確認した。北の区画と南の区画があり、両区画には階層差があると想定した。

多賀城市文化財調査報告書第 134 集

多賀城市内の遺跡１

－西沢遺跡第２次調査の概報－

平成 29 年３月 24 日　発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目 27 番１号
電　話（０２２）３６８-０１３４

発行　多 賀 城 市 教 育 委 員 会
多賀城市中央二丁目１番１号
電　話（０２２）３６８-１１４１

印刷　今 野 印 刷 株 式 会 社
仙台市若林区六丁の目西町２番 10 号
電　話（022）２８８-６１２３